ム唱歌の初の方の「カアカアカアカラスガ」といふところまでのリズムとか、「出た〜月が」といふ唱歌の「デタデタ」のところのやうなリズムがそれであります。

これは、歌はうとする子供の気持が、真先に、動こめたエネルギーとしてつき出されて高い音となり、それからその気持と、エネルギーと息とが一時衰へて、低い音となり、しばらく休んだ形となつた上で、再びそのエネルギーや気持や息が、蘇へつて来て、高い音となるといふ、子供の生命活動そのもの、自然のリズムと関係するものでありますから、自然その生命のリズムに適つた、高い低い、強い弱いといふ順序のリズムの歌の方が、子供にとつて、最も親しみあく、又歌ひ易いといふのであります。

歌のリズムから運動のリズムへ　幼児が歌を歌ふ時、首を振つたり、手を叩いたり、足踏みをしたりして、何時の間にか、歌のリズムに合せた、手拍子足拍子をとつて歌つてゐることを、しば〜見受けることがあります。かういふことは、自分で歌ふのではなく、人の歌ふのを聞いてゐるだけの時でも、時々やることがあります。

これは、音を聞くにつれ、或は歌ふにつれて、幼児の心の中に、たゞよひ始めたところのリズム感情が、幼児の全體の心に波打たせて、その波の動きを運動を司る方の心の部分にまで押し及ぼしたゝめに起つた事柄でありまして、殊に、見るとか、聞くとか、動くとかいふ、いろ〳〵の心の動きが、まだはつきりとその働き方を分けてゐないところの、蒙然とした幼児の心には、よくあり勝なことであります。

即ち、リズム感情を呼起すやうな音を聞いたために、幼児の心の中に振ひ起されたリズム感情が、たちまちその子供の心の全體の動き方を、そのリズムに合せるやうに動かし始め、その結果、その全體の心の動きと離れることの出来ない関係にある、手や足まで、いつしよになつて、そのリズムの通りに動き出したものであります。

これを手近かな例にたとへて申し上げますと、こゝに一本の小さな松の木があるといたしませう。今誰かゝその木の下枝に手を触れて、かすかにそれを動かしたとして御覧なさい。さうすると、その下枝につらなる幹が、かすかに震へるでありませう。幹が震へ出したら

今度は、その幹につらなつてゐる他の上枝までが、皆かすかに震へずに居られないであり
ませう。丁度心の枝にもたとへるべき、同じくといふ動きからしてリズムを傳へられたため
に、その幹にあたる心の大本が、震へ出し、その幹が動いたために、同時にその上枝にも
たとふべき手が動き出したといふやうに考へましたならば、これらの關係が餘程はつきり
して來るかと思ひます。

かやうな關係で、歌を聞いた時に起されたリズム感情が、手足の運動を起しますと、今
度はその逆に、手足の運動のリズムが、心の中にリズム感情を呼起し、その結果、歌と運
動との二つのリズムから來る、一層强いリズム感情を心の中に呼起して、幼児の快感はま
す〳〵高められて行くのであります。

かやうな、手拍子、足拍子のやうな運動は、歌を聞いた時だけとは限らず、何か嬉しい
ことが子供の心の中に起りさへすれば、すぐにそれをこの律動的な運動の形で外に表すも
のであるといふことは、いろ〳〵の場合で觀察されます。

例へば、久しぶりで、郊外散歩につれ出された時など、嬉しくて〳〵たまらない氣持を
表すために、子供はよく、親の手もとをすり抜けて先走りしては、片方の足を、二度づゝ
續けざまに踏んでは、次に他方の片足を又二度づゝ踏み續け、それを代る〴〵やつては、
嬉しさうに跳ねて行く姿を、われ〳〵はしば〳〵見せられることがあります。子供はか
うして自分の嬉しい氣持を、足の運動のリズムとして表し、更にそのリズム運動によつて
呼び起されるリズム感情を、一層强く經驗しては、ます〳〵嬉しくなつて行くのであり
ます。

幼児の踊　この運動のリズムを樂しむところの子供の動作が、とりもなほさず、子供の自
然の踊であり、ダンスであります。從つて若し大人の考からして、子供の運動の自然のリ
ズムを無視して作つたやうな律動體操を、子供に强いるやうなことがあれば、子供の美感の
發達を促すどころではなく、かへつて苦痛と緊張とを與へて、麗しい美感の發達を妨げる
ことさへ現れるに至るでありませう。

例へば、比較的活動性の乏しい老人の間に多く好まれさうな、あのゆつくりとした拍子で、静かに歩むところのお能のリズムを、活動性に富んだ幼な児のダンスの中にとり入れたとして御覧なさい。修養とか、調練とかいふ目的のためにやるのならいざ知らず、いやしくも、幼児の自然の要求、なかんづく、美的感情の自然の育成のためにやる踊であるならば、かやうなゆつくりしたリズムは、幼児にとつて、むしろ苦痛であるかも知れません。

さうかといつて、南洋の土人の民族ダンスのやうな、極端に急激な運動をしなければならぬやうなリズムも亦幼児にとつては無理であらせう。

そんな極端な例を引くまでもなく、子供等の生活の中に、時々見うけられるところの、それに類した例を拾つてみるならば、運動会などで、全校の兒童が、樂隊の音に合せて行進するやうな時、若しその樂隊の音が、大きな子供の方の歩行運動のリズムに最もよく適つたやうな速力で奏でられると、その時いつしよについて歩いてゐる小さな子供等は、可哀さうな程努力しながら、その不自然な速度に、自分の歩行運動を合せようとしてあせつて居ることを、しば〳〵見受けるでありませう。かういふ時、誰でも、その樂隊のリズムがその小さな子供らにとつて不自然であるといふ事に氣がつくことが出來ます。

これらの例から考へても解りますやうに、單に速さといふ點だけからみても、幼児の運動の自然のリズムといふものが、その年齢に應じてそれ〳〵違ふものであることを知り得る以上、われ〳〵は幼児の美感を、自然の間に育んで行くところの、踊りといふものを、如何なるリズムの下で行はせるのが一番よろしいのかといふ問題について、一般の研究と工夫とを積まなければならぬものであることを痛感させられます。

第九講　幼兒の情緒と本能

一　臆病な子供の原因と矯正法

臆病の原因　幼兒は、一方において、お話を聞いたり、繪を描いたり、歌を歌つたり、踊を踊つたりして喜ぶところの、美しい純な美的感情をもつてゐると同時に、他方では、怒つたり、怖がつたり、悲しんだりするところの激しい情緒といふ感情をもつてゐて、時には、その情緒を行ひに表して、喧嘩したり、逃げ廻つたり、泣き叫んだりするといふやうなことは、幼兒の日常生活においては、しば〳〵見るところであります。

かやうな喜怒哀樂等の激しい感情即ち情緒が、外面に現れて、いろ〳〵の行動を起す時に、これを本能活動といつて居りますが、この本能は、前にも述べましたやうに、人間の生命を保つて行くためには、なくてはならぬ、大切な生れながらの働きであります。

かやうな本能は、幼兒の時代は最も強く現れるものでありまして、その意味で、幼兒期は、本能全盛時代ともいふべく、いろ〳〵の本能が、次から次へと、力強く目覺めて來る時代であります。

これらの諸々の本能の内で、最も根本的なものは、怖がりの本能と、怒りの本能と、愛の本能との三種類であるといはれて居ります。

その内の怖がりの本能については、すでに幼兒の本能のところで、簡單に述べておきましたが、この本能が、極端に強く現れると、いはゆる臆病といふものになつてしまひます。

臆病の原因については、いろ〳〵云はれてゐるやうでありますが、しかしその大部分は生れてから後に、家庭で植ゑつけられたものでありまして、多くの幼兒に見られるところの、暗いところを怖がるといふ臆病の如きは、確かに、家庭で教へ込んだものであります。

大きな音　この點について、アメリカの兒童心理學者ワットソンが、興味ある實驗をし

て居ります。若し、暗いところを怖がるといふことが、生れながらのものだとすれば、まだ何も教へられてゐない赤ちやんが、暗いところへつれて行かれた時、怖いといふ態度を示さなければならぬはずであります。

ところが、實際深山の赤ちやんを、暗いところへつれて行つてみたのですけれども、どの兒も決して怖がりも、泣きもしなかつたのであります。これで、暗いところを怖がるといふことは、決して生れながらのものではないといふことが判つたのであります。

次に明るいところで、赤ちやんの後の方から、突然、ガーンといふ大きな音を出してやると、どの兒も皆びつくりして泣き出します。これで、突然起る大きな音といふものはどんな子供に對しても、生れながらに、その恐怖心を起させるところの原因となるものであることが判るでありませう。

今度は、又暗いところへつれて行つて、そこで突然ガーンといふ大きな音を立てゝみました。すると赤ちやんは、その大きな音を聞いて、びつくりして泣き出します。かういふ實驗を數度繰返して、何時でも、暗いところで、大きな音を聞いては、恐怖心を起させるといふ狀態において居りましたところ、おしまひには、大きな音を聞かせなくとも、暗いところへつれて行きさへすれば、すぐ怖がつて泣き出すといふことなつてしまひました。

この實驗で明かに示されて居りますやうに、暗いところを怖がるといふ子供の心は、どんな子供でも必ず怖がるところの、大きな音を聞かされるといふ原因のために、すでにその心が恐怖心で一杯になつて居ります時に、たゞ〳〵目の前に暗いところが見えたので、その暗いといふことゝ、怖いといふことゝが、結びついて、今度は逆に、暗いところを見さえすれば、すぐ怖いといふ氣持が、呼び起されるといふ風に、習慣的に作り上げられたものであります。

同じ理窟で、どんな子供でも、生れながらにして必ず怖がるところの大きな音を立てゝ先づその子供の心を恐怖心で充たしておいて、それから、その子の目の前へ何か持つて行つて見せると、今度は、その物を見ただけで、すぐ恐怖心を起すといふことになるのであ

ります。

この實驗の一例として、ワットソンが、赤ちやんに、兎を見せて怖がらせるやうにした順序をお話いたします。まだ兎を見たことのない、生後九ケ月の赤ちやんの側に、兎をつれて行つて見せましたところ、その赤ちやんは、珍しさうに、お手々をさし延べて、その兎を撫で廻しては喜んでゐるのであります。兎の代りに、犬をつれて行つても、猫をつれて行つても、やはり同じことで決して赤ちやんは、かういふ獸を怖がるといふ心を、生れながらにして與へられてゐるものではないといふことが、これで明らかにされたのであります。

そこで、赤ちやんが、その兎を、諸々として撫で廻してゐる眞最中、突然その後の方でガーシといふ大きな音を立てたのです。勿論、その赤ちやんは、びつくりして泣き出しました。かういふことを、二三度繰返してゐる間に、今度は、大きな音を立てなくとも、その一の兎を見さへすれば、すぐ怖がつて泣き出すやうになつてしまつたのであります。即ち兎を怖がるのは、生れながらの子供の心ではなくして、生れてから後に植えつけられたところの恐怖心であるといふことが證明されたわけであります。

かうして一旦兎を怖がる心を植えつけられた子供は、今度は、兎だけに止まらず、それと似よりの獸といふ獸を皆怖がるやうになるばかりでなく、おしまひには、毛で作つた品物までも怖がるやうになつてしまひます。ワットソンは、かうして恐怖心を植えつけられた子供が、つひに毛のショールを見て泣き出すやうになつた實驗例をあげて居ります。

世間には、よく、犬や猫などの獸を、非常に怖がる子供がありますが、これはやはり、かうして何か最初に、怖がる氣持を起させられてゐるところへ、たま〳〵犬の姿なり、猫の姿なりが見えて來たので、それから犬や猫を怖がるやうになつたものでありませう。例へば、緣先で子供といつしよに、犬をあやしてゐる親が、その犬の頭の上の方で、食べ物を見せながら、「ワンといつたらこれをあげよう」などゝいつてゐる場面をよく見うけますけれど、かういふ時犬は、食べたいといふ强い本能にかられて、全身の勢力を皆聲にした

と思はれるばかりの、とてつもない大きな聲で、しかも突然に、「ワン」と吠え出します。この大きな音が、どうして子供の心に恐怖心を起させやすにおきさせう。たとへそれは泣き出す程までの强さには、現れて來なかつたにしても、必ずやその內面に、一種の恐怖心を呼び起してゐるにちがひないのであります。

かくて次第に犬を見ることを怖がり、それに似よりの猫や、馬や、牛などの獸を見ることを怖がるといふ習慣になつて行くのであります。

「いけません」かやうに、大きな音を突然聞かされるといふことは、どんな子供に對しても、生れつき恐怖心を起させるものでありますが、それと同時に、熱いもの、冷たいもの、刺すやうに痛いものなどに對しても、子供らは、怖がらないまでも、それから避けようとする態度を示すものであるといふことについて、一應考へておく必要があります。なせなれば、この避けようとする態度なり、引込めようとする動作なりが、心の働き全體に對して、引込勝ちな習慣を植えつけ、そのために次第に臆病になつて行くといふ結果に本

ることがあるからであります。子供が一度お風呂で、熱いといふ感じを起して、手を引込め、全身をすくめてしまふと、その次から、お風呂場を見ただけで、すくみ上り、はては怖がつて泣き出すといふことがしば〳〵起るものであります。

かやうな「すくみ上り」や「引込み」の感じを起させて、事毎に、子供を臆病にさせてしまふやうな原因が、しば〳〵家庭で與へられます。母親なり、父親なりが、不用意に發するところの、「いけません」とか「コラッ」といふ怒鳴り聲がそれであります。

これは、大きな音を突然發するといふ點で、どんな子供にも、先づ恐怖心を起させますが、更に、何か掴まうとして、元氣よくさし出した手を、急に引込めるといふことで、「すくみ上り」といふ點から、一層その恐怖心に環をかけたやうな結果になり、かういふことをしば〳〵繰返してゐると、何時とはなしに、オド〳〵した、極端に恐怖心の强い、いはゆる臆病者を作つてしまふやうになるのであります。

從つて臆病な子供を作らないやうにするためには、一つでもその原因を少なくするため

に、出来るだけ家庭の中から「いけません」といつてけなしつけるやうな、否定的な悪癖を除くやうに心がけることが、最も望ましいことであります。

その他、急にからだの安定を失つて倒れるやうなこともまた、どんな子供でも、生れながらの恐怖心を呼び起すところの原因となるものであります。子供を不意に引倒すやうなことは、勿論絶対に避けなければなりません。お風呂に入れる時、浴槽の中で、子供のからだを、充分安定するやうに抱いてやりませんと、子供がお湯の中で倒れさうな、不安定な感じを持つために、本能的に恐怖心を起すことがありますし、又流し場などで、過つて転んだりすると、たとへ痛みを感ずる程打つたのでなくとも、たゞ引つくりかへるといふこと、即ち支へを失つて、不安定の感じを経験したといふことだけで、本能的な恐怖心を起すこともあります。かういふことをしば〳〵繰返してゐるうちに、その恐怖心と、その特見たお風呂場といふものとが結びついて、今度は逆に、お風呂場を見さへすれば、すぐ怖がつて入りたがらないやうになるといふ結果にもなるのであります。

かやうに突然大きな音を出すとか、すくみ上らせるとか、不安定にするとかいふことはどんな子供に對しても、生れながらにして恐怖心を起させるところの原因となるものでありますが、それ以外の事柄は、ほとんど皆、生れた後につけ加へられた恐怖心であり、又臆病でありますから、家庭の努力によつて、次第々々にその臆病を矯正することが出來るものであります。

勿論、生れてからの習慣でありますから、成るべく早くそれを發見して、早く手當てすれば、それだけ矯正の効果が著しくなるものであります。

かやうな臆病の習慣は、満三歳頃までの間に、完全に作り上げられるものであると、ワトソンなども云つてゐる程でありますから、それまでの間の、幼児の家庭教育といふものは、すゐぶん責任の重いものであり、臆病な子を作るか作らぬかは、この三つ子の時代の、家庭の教育のやり方如何にかゝつてゐるといつてもいゝ程であります。

幼児の怖がるもの　しからば、この時代から、幼児期の終りにかけて、子供らはどんな

ものを怖がるやうに習慣づけられてゐるものかといふことを、一通り心得てゆくことは、我が子の特色を知り、それにもとづいて、適當な導き方を工夫して行く時に、役立つことと思はれますから、私が多數の幼児の家庭について、詳しく調査した結果の一端を、こゝにお話することにいたします。

その結果は、年齢及び男女の違ひで、多少異つてゐますけれども、大體の傾向から見ますと、雷鳴・蛇・暗い所等を怖がるものが最も多く、これに次ぐものは、犬・化物の話・火・影法師・見知らぬ人・ブランコに乘ること・舟に乘ること等であります。

これらの中で、特に家庭教育上重要だと思はれる、二三の問題について、お話いたしますならば、先づ第一に、暗い所を怖がるといふ子供が、幼児期の初よりも、終りの方に至つて非常に多くなるといふ事實であります。殊に女の子の場合に、この傾向が一層著しくこれを實際の數についてみますと、調査の多數の女兒の中に、暗い所を怖がる子供は、四十五パーセントしか現れなかつたのに、四歳半には七十四パーセントに増加し、六歳半では、八十二パーセントといふ高い割合を示すやうになつてゐます。

これで見ますと、暗い所を怖がるといふ習慣は、小學校入學前までの、幼児期において非常な勢で植えつけられてゐるものであるといふことが、はつきり判ります。小學校入學後になりますと、さういふ習慣の子供がだん〳〵少なくなりますけれども、それでも、一度作り上げた習慣は、さう急に無くなつてしまふといふわけにも行かないもので、尋常五年あたりの子供等の間にも、なほ約六十パーセント位、暗い所を怖がる子供が殘つて居ります。これから考へましても、幼児期の家庭教育といふことは、非常に大切なことでありまして、幼児の大部分は、この間において、暗い所を怖がるといふ習慣を植えつけられてしまふのであります。

次に、蛇を怖がるといふ子供は、男女ともに、年齢の進むに從つてだん〳〵多くなり、幼稚園時代の前半頃は、男兒が六十パーセント位、女兒が七十パーセント位であつたものが、幼稚園の終り頃になりますと、男兒は六十五パーセント、女兒は八十パーセント位に

がり、小學校に入るやうになつても、餘り減じません。これは、蛇が恐しいものであるといふことを、だん〳〵教へられるやうになり、そして、それを避けるといふことが當然必要なことであることを知るからであります。

次に、犬を怖がるといふ子供は、幼兒期には、男女とも大體六十五パーセント前後の割合で現れますが、小學校入學頃から、急に少なくなり、尋常二年になりますと、男兒は二十三パーセント、女兒は四十一パーセントとなり、四年生では、男兒が二十一パーセント女兒は二十七パーセントといふ少ない割合になつてしまひます。

これなどは、幼い時に、植ゑつけられた習慣が、年といふもに、改められて、犬は決して怖いものではないといふことを、子供ら自身、やうやく自覺するやうになつて行くものであることを、物語る事實でありまして、後から植ゑつけられた習慣的な臆病といふものは直せば直るものであるといふことを示すものであります。

臆病の矯正法　怖がるといふ本能の働きは、生命の保存を脅かすやうな危險なものを恐れ、これから遠ざけようとするために働きかけるのであるならば、最も自然なものであり、又極めて大切な働きでありますけれども、隣りの部屋でさへも、暗いから一人で行けないとか、犬さへ見れば、怖がつて母親にしがみつき、どうしても離れられないといつたやうな、それこそ愚にもつかぬことを、無暗やたらに怖がるといふことは、もはやかやうな正當な恐怖心を通り越して、臆病神にとりつかれてゐるのでありますから、かやうな臆病は出來るだけ早く矯正しなければなりません。

右に述べた、私の調査結果から見ても判るやうに、子供の恐怖心といふものは、年月のたつと〳〵もに、次第々々に薄らいで行くものでありますから、多くの場合、自然に放つておいても、時が來れば、少しづゝ直つて行くものであるとも云へますけれども、しかし、それをもつと早く導いたならば、餘計な心配や苦勞をせずともすむやうなことが、ずゐぶんあることゝ思ひますから、かやうな惡い習慣は、出來るだけ早く直すに越したことはありません。

それには先づ、どういふ原因で、その子が臆病になつたかといふことをよく調べてみる必要があります。例へば、お婆さん好きの孫娘が、非常に臆病なので、その原因を調べてみると、そのお婆さんがまた大の臆病者で、暗くなると、隣りの部屋へも一人では行けないといふ有様、そのため始終側にゐるところのその孫娘までが、何時とはなしに暗い所を怖がるやうになつたものらしいといふことが判つたので、その娘を、しばらくそのお婆さんの側から離して修養させたところ、だん〳〵その臆病が直つて行つたといふ實例などは注目に値するものであります。

ところが、どんなに話して聞かせても、教へてやつても、どうしても直らないといふ、臆病な子供もしば〳〵見受けられますが、これなどは、もはや理窟でも何でもなく、前に述べた實驗例で示されてゐるやうに、幼い時においてすでに、暗い所とか、獸とかを見せられると同時に、大きな音とか、支へを失ふとかいふ、恐怖心を起させる根本的な原因を與へられて、その嗅い恐怖心とそれらのものとが、固く結びついてゐるのであります

その固い自然の結びつけを、自然に解いてやるやうな、特別の手段を講じなければならないことになります。

この點について、ワットソンは、幼兒の臆病を、實驗的に矯正したところの、興味ある實例を述べて居ります。

兎を怖がる習慣のついてゐる幼兒を矯正するために、先づ、毎日一回、午後のお腹の空いてゐる時を選んで、その子供に、食べ物を與へながら、一方で、成るべくその子供から離れたところで、しかも、その子から見えるところに、他の人に頼んで、兎をおいてもらふことにしました。子供は御馳走を食べる時の快感を經驗しながら、遠くにゐる兎を見て居ります。そして、その兎は、その子が御馳走を食べてゐる時以外には、決して見せないやうにしたのであります。

翌日又子供が御馳走を食べ始めようとする時、先づその兎を、昨日おいたところにおいて、子供に見せておき、それから、少しその兎を子供の方へ近づけてもらひます。その時

若し、その子が怖がるやうな樣子を見せましたならば、兎を近づけることをよしてしまひます。

かうして日一日と、その兎を子供の方へ近づけて行きますと、數日の後には、食卓の上までその兎を近づけても、その子供は、怖がるやうな樣子を示さなくなり、おしまひには膝の上に載せられても、少しも怖がらないやうになつてしまひました。

かくて、一度植えつけられた臆病の習慣が、根氣强い實驗的な矯正法によつて、とうとう根こそぎ取除かれ、つひには、兎ばかりでなく、他の獸や、毛皮で作つたものを怖がる習慣をも、見ん事取り除くことが出來たといふことであります。

これはつまり、最初、大きな音を出して、本能的な恐怖心を起させておきながら、それと同時に見せた兎に、その恐怖心の原因を移して行つたものでありますから、今度は、その逆に、御馳走を食べながら、快感を起させておいて、その快感を起しながら、いつしよに見てゐるその兎にも、その快感を移して行つて、次第にその兎と快感との結びつきを强くさせ、その結果、前に結びつけられた恐怖心と兎との結びつきを、次第に弱まらせて、つひには、御馳走を食べなくとも、その兎を見さへすれば、御馳走を食べてゐた時と同じやうな快感が起つて、何時の間にやら、その兎との親しみの感情が出て來るといふ、極めて自然な心の移り變りの原理によつた矯正法でありますから、兒童の心理に最もよく叶つた、矯正法の一つであるといふことが出來ます。

世間によくあるところの、暗いところを怖がる臆病な子供の習慣を直さうと思へば、やはり同じやうな理窟で、御馳走とか、唱歌とか、お話とか、その他子供の快感を呼び起しさうな、何等かの原因を與へながら、少しづゝその暗いところに馴れさせて行くといふ方法をとればよいわけであります。

例へば、寢室で、子守唄を歌つて聞かせながら、その子に快い感じを起させておいて、だん〳〵その部屋の電燈の明るさを減じ、更にその部屋の電燈は消してしまつて、隣りの部屋から、襖の間を漏れて來る位の、仄かな明るさで、子守唄を歌つて聞かせ、つひには

どこからも光の漏れて來ない眞暗な部屋で、歌つて聞かせるといふやうな順序で、快い氣持と暗い所とを結びつけてやるならば、やがてその子の暗い所を怖がる臆病の習慣を取除いてしまふことが出來るわけであります。

二　怒りつぽい子供の原因と矯正法

怒る原因　怒は、人間に生れながらにして與へられた、强い情緒でありまして、それが激しくなると、聲を立てたり、手を振り廻したり、人をなぐつたり、物をとつて投げつけたりするやうな亂暴ともなります。どこの子供にもよく見受けられる喧嘩ずきの本能といふものも、この怒りの情緒が强く外に現はれて來たものであります。

かういふ怒の情緒とか、喧嘩本能といふものも正義のために憤るところの義憤といふやうな形で現れるならば、それは誠に望ましいことでありますけれども、これに反して、何でもないことに、すぐ怒り出したり、亂暴し始めたりするといふことになりますと、その子の將來の圓滿な人格の發達に對しても、よくない影響を與へるものでありますから、家庭教育上餘程注意しなければならない問題となるのであります。

子供の怒りつぽい性質は、どうして作り上げられるかといふことについては、すでに前の「乳兒の教育的な取扱方」といふところで、少しく述べて來たのでありますが、要するに、子供の運動とか、慾望とかを妨げることが、一番大きな原因であつて、それ以外の事柄は、大抵この根本原因が元で、すでに怒りの感情を起してゐるところへ、後から結びつけられて、怒を誘ふ原因となつたものであります。從つて、それらは、生れてから後の習慣で植ゑつけられたものといふことが出來ます。

このことについてもワットソンは、念入りな實驗をいたしまして、結局、赤ちやんは、そのからだのどこかをつかまへられて、その自由を束縛された時に、怒りを表すものであるといふことを明らかにして居ります。

子供の運動の自由を束縛し、その慾望を抑へつけるといふことは、日常の家庭生活に於

いても、しば〳〵見うけられるところであります。して、乳兒のところであげた、入浴の際の、着物の脱がせ方、着せ方を素早く、手際よくやらないと、怒りつぽい子供を作つてしまふものであるといふ例など、幼兒の場合でもよく當てはまる例であります。

その他、たゞ〳〵訪ねて來た叔父さんが、子供の御機嫌をとるつもりで、「どうれ、どんなに重くなつたか、叔父さんがだつこしてみよう」などゝお世辭を振りまきながら、子供を膝の上に引ずり上げて、強く抱きしめようとする時など、子供は自分の活動しようとする慾望を抑へつけられるので、嫌がつてその手からすり抜け、時には、「イヤア」と叫んで叔父さんの手をひつぱたいて逃げ出すといふ場面を見うけることもありますが、これなどは、やはり自由を束縛されたために、輕い怒りの感情を起し、つひそれが亂暴といふところまで行つてしまつた例でありまして、兒童の心理を辨へない叔父さんならば、「何てこの子は亂暴な子だらう」といつて腹を立てるかも知れませんが、それは、腹を立てる方に無理があるのであります。

もしこんなことが、しば〳〵繰返されるやうなことにでもなると、丁度前の暗い所を怖がる子供を作り上げる例のところで述べたと同じやうな理窟で、その子供は叔父さんに抱きしめられて、不自由な思をしたゝめに起した怒りの情緒と、その叔父さんの顏とを、心の中に強く結びつけられて、今度は、抱きしめられなくとも、叔父さんの顏を見さへすれば、すぐ腹だゝしくなつたり、怒りつぽくなつたり、果ては亂暴を働きたくなつたりするといふ結果になることがあります。

亂暴な子供を直した實例　子供の運動を束縛することは、子供を怒りつぽくさせる一つの原因であるといふことから考へて、運動したいといふ氣持、遊びたいといふ慾望を抑へつけるといふことも亦、やがて怒りつぽい子供を作りあげる原因を與へるものであるといふことは、當然考へられることであります。

この理窟からして、手におへない亂暴な子供を直すことの出來た、私の實驗例をお話することにいたします。それは、八歳になる低能な女の兒で、私のところへ相談に參りまし

た時の親の訴へは、學齢に達しても、ろくに言葉もいへず、三つか四つ位の子供の智慧しかなく、それに時々亂暴するので、非常に困つてゐるから、何とかして亂暴を鎮め、少しでも言葉のいへるやうに導く方法がないでせうかといふことでありました。勿論教育相談所へ來るまでには、大學病院の精神科、小兒科等の各科へつれて行つては、それ〳〵の專門の博士にも診てもらつたものですが、どこへ行つても、これは生れつきだから、どうにもしやうがないといつて見離されてしまつたといふのであります。

そこで私は、醫學の方で見棄てられた子供でも、まだ心理學の力と教育の愛とが殘されてゐる以上、必ずしも救へないものでもないだらうといふ信念をもつことが出來ましたので、とにかく、研究的に一生懸命導いてみますから、一切の處置法を私に全部任せ切つてしまふやうにといふ條件で、いよ〳〵その子供の指導を引受けることにいたしました。

それから、適當な家庭教師を選んで、しばらくその子の家庭に住まはせ、その子供の生活狀態を詳細に觀察させ、かつそれを一々私に報告させることにいたしました。かうして觀察してゐると、成程これは聞きしにまさる亂暴な子供で、ほとんど氣違ひじみてゐるといつてもいゝ程の振舞ひを、毎日々々繰返してゐるのであります。

別にこれといつて取立てるやうな直接の原因も見當らないのに、二時間か三時間位たつと、急に機嫌が惡くなつて來て、みる〳〵うちにカッとなつて怒り出し、何だか譯のわからないことを口ずさんでは喚き立てる、泣き叫ぶ、はてはそこいらにある火箸であらうが鋏であらうが、手當り次第取つてぶつけるといふ狂亂沙汰、そして二十分間位荒狂つたかと思ふと、やがて平靜になつて、機嫌も直る。それから二時間か三時間位平靜な狀態を續けてゐるうちに、又しても前の亂暴が突發する。何しろそれが突然勃發するものでありますから、初の間は、家庭教師も身をかわす暇がなくて、その子の投げつけた品物に傷つけられ、からだに怪我が絶えないといふ有樣でありました。かういふ狂亂の狀態が、今まで永い間續いて、近頃それが特に甚だしくなつて來たので、親が心配して教育相談所を訪れた譯だつたのであります。

そこで私は、この子供のかやうな氣違ひじみた亂暴の原因を診斷するために、その家庭教師に命じて、いろ〳〵の事柄を調べさせたのでありますが、その中で最も大切だと思はれましたことは、低能な子供であるところから、親は世間態をはぢて、その子をほとんど外へ連れ出さなかつたといふ事實であります。

これは、たとへ低能兒であるにしても、八歳にもなれば、遊びたいといふ自然の欲求が非常に強いものであるにもかゝはらず、その欲求を無視し、これを極端に束縛したところの、最も不自然な取扱ひでありまして、この子供の亂暴の原因も、或はこゝに存するのではないかといふ豫想を抱かせるのに充分な事實であります。

かくて私は、先づこの原因を除くことが、この子の教育的治療上最も重要な問題であるといふ診斷に到達いたしましたので、早速その處置法について、家庭教師に内命を與へました。それは、もうそろ〳〵亂暴が始まる時刻だと思はれる少し前に、外へ連れ出して遊ばせるといふ、極めて簡單な治療法であります。

ところが私のこの心理學的診斷とその治療法とが、見ん事適中いたしまして、遊びに出ると、不思議にも、亂暴を始める筈の時刻が來ても、なか〳〵亂暴が始まらず、その爲に今まで二時間か三時間おきに亂暴してゐたものが、四時間か五時間おき位になるといふやうに、平靜な狀態の時間が延びるやうになつて來ました。

この方針で指導を續けてゐる間に、今まで一日に五六回位の發作のあつたものが、四五回に減じ、三四回に減じ、そのうちに、全々起らない日も出て來るやうになり、はては、三日に一遍、四日に一遍といふやうに、偶にしか起らないやうになり、つひにこの治療法を始めてから、三ヶ月にして、完全にその發作的な亂暴を治療してしまふことが出來たのであります。

その後今日まで三ヶ年を經過して居りますけれども、あれつきり、あの亂暴は消え失せて、少しも再發しないといふ好結果を示して居ります。

第二の實例は、尋常六年の男の兒で、幼兒のところでお話するのは少し不適當かも知れ

させんけれども、内容から見ると、前の例とよく似て居りますから、便宜上こゝに附加へてお話しようとするものでありますが、それは、父の勤めの都合で、半年程前に、現在の家に引越して來てから、どういふものか、その子の氣性が荒々しくなり、御飯の時など、少しでも氣に入らないおかずがあると、すぐカッとなつて、怒り出し、箸を放り出す、茶碗をたゝきつける、はては、「ワーー」と大聲をあげて喚き立て、手足をもがきながら、十分か二十分間位荒れ狂ふといふ困つた子供、それに近頃よく母親に楯ついては、喚きたてるといふやうな有樣なので、家庭でもほと〳〵もて餘してゐるが、何とかよい指導法がないものかといふ相談なのであります。

この子供は、學校の成績も中以上で、學校では少しも非難の打ちどころのない子供なのでありますが、たゞ近頃になつて、家庭でかやうな亂暴を始めるやうになつたので、親が心配し出したといふ相談なのであります。

そこでいろ〳〵調べてみますと、やはりその子をさうさせた原因が立派に備つてゐるのであります。それは、今まで住んでゐた家は、近所に子供が多く、その子も、始終それらの子供と遊んでゐたのでありますが、今度の家は、近所に一人の遊び友達もなく、そのため、自然家の中で暮す時間が多くなり、おまけに、中學校の受驗準備が迫つて來たゝめに閉ぢこもる生活が一層多くなつたといふ事實であります。

それから、その親に、子供がどうして怒りつぽくなるものであるかといふことについてよく說き聞かせた上で、先づその子の狂亂を救ふためには、勉强よりも、遊びを選ばなければならぬことをお話して、子供が喜んで熱中するやうな、全身運動の遊びを選ぶやうにそれ〳〵その種類などを敎へて歸しました。

その後この子供は、自轉車を買つてもらつて、暇さへあれば、夢中で乘廻して遊んでゐるうちに、とう〳〵今までの亂暴が、何時とはなしに消え失せてしまつたのであります。

これらの實例から見ましても、遊びたいといふ、子供の自然の慾求を抑へつけるといふことは、子供のからだを抑へつけて、その運動の自由を奪ふと同じやうに、子供の心に怒

りの情緒を、知らず〳〵の間に植えつけることになるものであるといふことが、よく了解されること、思ひます。

幼兒を怒らせる事柄の調査　かやうに幼兒は、自分の自由を妨げられた時に怒るといふのが、根本の原因でありますが、それが日常の實際生活の、どんな事柄に多く現れて來るものであり、そしてそれが、年齢の進むに從つて、どんなに變化して行くものであるかといふ點について、私が多數の幼兒の家庭について調査した結果を少しくお話することにいたします。

家庭で觀察される幼兒の怒りの中で、一番多く現れるものは、「友達にいぢめられて」怒るといふことであります。これは男の子と女の子とで餘程ちがつた趣を表すものでありまして、男の子の場合ですと、滿四歳頃には、五十二パーセント位しか現れて居りませんが五歳頃には、七十九パーセントに昇り、五歳半では九十一パーセントといふ高い割合を示し、小學校入學後は、著しくその割合を減じて行きますが、それでも、他の何れの原因よりも、常に最も多い割合を示して居ります。

女の子の場合には、これに反して、四歳の時に最高の割合九十パーセントを示し、五歳には七十八パーセントに降り、その後次第に減じて行く傾向を示して居ります。

これで見ますと、女の子は早く社會的生活に馴れて、お友達を仲よく遊ぶといふことが出來ますけれども、男の子は、その反對に、次第々々に友達との衝突が多くなり、お互に自分を突張つては喧嘩をするといふことが長く續き、幼稚園時代の中頃から、やうやく社會的態度が出て來て、友達と融和することが出來るやうになるものであるといふことが示されてゐるやうであります。

かやうな子供の喧嘩は、勿論、子供が、自分の運動なり、慾望なりを妨げられた時に起るものでありまして、親から見れば、それは、他の子供にいぢめられて、怒つたり、泣いたりしてゐるものと見られるのであります。

その次に多く現れる事柄は、親なり、兄姉なりのために「遊んでゐる玩具を取り上げら

れて」とか、或は、「見てゐる繪本を取り上げられて」怒るといふことでありまして、これも大體、男の子の場合では、幼稚園時代の中頃まで次第に多くなり、その後著しく減じて行くといふ傾向を示して居ります。即ち四歳頃には、八十三パーセント位の子供らは、かういふ怒りを家庭で現しますが、五歳になると八十六パーセント、五歳半には八十七パーセントといふやうに次第に增して行つて居ります。

これに反して女の子の場合には、初が多く、後には次第に少なくなつて行くといふ傾向を示し、四歳では九十パーセントといふ高い割合を示して居りますけれども、五歳半には七十七パーセントに減じ、その後次第に減じて行くといふ結果を示して居ります。

かやうに、運動を妨げられるとか、持つてゐる物を取られるとかいふやうな、實際の活動や實際の品物に關係した、謂はゞ具體的な慾望といふものを妨げられた時には、八十パーセントとか九十パーセントとかいふ大部分の子供らは、怒りを感じ、これを顏なり、動作なりに表すものでありますけれども、「親に叱られる」とか、「欲しいとねだる本を與へられない」とか、「友達に馬鹿にされる」とかいふやうな、精神的な壓迫とか、拘束とかを受けた時には、かやうな著しい割合で、子供の怒りが現れるものではなく、大概七十パーセント前後といふ割合で現れてゐるやうであります。

幼兒を怒らせない方法　今まで述べて參りました事柄で、大體、幼兒はどうして怒るか、怒りつぽい子供がどうして出來るかといふことについての說明がついたと思ひますから、さてそんならば、怒りつぽい子供を作らないやうにするためには、どうしたらよいかといふ、家庭教育上の大事な問題にふれることになるのでありますが、今まで述べたところにも、ところ〴〵その問題にふれて參りましたので、こゝには、まだ述べつくせなかつた點だけについて、簡單にお話しようと思ひます。

右に述べた私の調査の結果から、幼兒の怒りといふものは、年齡の進むに從つて、次第に變つて行くものであり、大體、滿五歳半を頂點として、それからは次第に下り坂となり小學校に入る頃になると、著しくその現れ方が少なくなるものであるといふ、一般的の傾

向を結論することが出來るのであります、から、怒りつぽい子供を作らぬやうにするためには、先づ幼兒期の注意が一番大切であるといふことが判るとゝもに、不幸にして、この怒り易い時期に、怒りつぽい習慣をつけてしまつたとしても、怒りといふものが、小學校入學後、次第に少なくなつて行くものであるといふ事實からして、決して教育の力で直せないものではないから、一生懸命その矯正のために努力することが必要であるといふことが、はつきりと示されてゐることゝ思ひます。

怒りつぽい子供を作らないやうにするためには、先づ幼い時分から、その子供を、やさしくかつ手ぎわよく取扱ふといふことを努めなければなりません。着物を着せるにしても、顏や頭を洗つてやるにしても、靴下や靴をはかせるにしても、きつく子供の手をしめつけたり、手荒く取扱つたり、ぐづ〳〵しながら取扱つたりするといふことは、子供を不快にし、いらだゝせることであります、から、母親は勿論のこと、女中や子守に對しても、子供の取扱ひ方を、手際よく運ぶといふ技術を練習させておくことは最も望ましいことであります。

次に子供の着物について特別の注意を拂ひ、着せ易く、脱ぎ易いものにするといふことであります。この點について、ワツトソンは、毛でつくつたシャツのやうに、袖が細くて、からだにひつゝくものや、ボタンの數が多くて、そのはめかけに手間のかゝる着物などは、子供殊に赤ちやんには不適當なものであるとして、日本のきもの式のゆつくりした袖のもので、ボタンも精々二つまで位にし、それも前の方だけについて居る着物が一番よいといふことを主張して居ります。

次に、子供自身に、身の周りのことを、出來るだけ素早く、テキパキとやつてのける習慣を、早くからつけておくといふことであります。着物を着る時などでも、ペチャ〳〵話をしながら、着せやえものなら、何時までも、手を袖に通さうとしては失敗し、またやり直すといふやうなことで、ぐづ〳〵してゐるうちに、子供が自分でも腹立たしくなつて來るといふわけであります。それよりは、着物を着る時には、專心そのことに心を向けて、

素早くそれをやりとげてしまふといふ習慣をつけることが、子供の動作を活潑にして、その運動したいといふ慾望を次から次へとはけ出させ、その間に少しも束縛とか、不自由とか、いらだたしさとかといふことを感ぜしめないで通せるといふ點で、どんなにか子供の心を朗かにさせることか知れません。

三　蒐集・好奇・同情・統率本能の指導

集めたがる本能　幼兒は、自分の生命を保ち、それを立派に伸して行くために必要ないろ〳〵の物を欲しがるといふ慾望を、生れながらにして與へられてゐるものでありまして、その中でも、食べ物を欲しがるといふ本能の働きが最も強く、幼兒においては、それが、毎日々々お菓子をねだるといふ形で現れて參ります。

私が多數の幼兒について調査した結果によりますと、お菓子を欲しがるといふ慾望は、五歳頃の幼兒において最も強く現れ、全體の九十パーセントの者が、絶えずこれでお母樣方を困らせて居ります。その後は、次第にかやうなねだりやの子供が少なくなつて參りますけれども、それでも、尋常三年以後の學童期に入つた子供でも尙六十五パーセント前後の割合で現れて參ります。

次に玩具を欲しがるといふ慾望も、相當多く現れるものでありまして、五歳から五歳半頃までの間に著しくその割合を增し、男兒では八十八パーセント、女兒でも八十二パーセントの子供らが、この慾望を強く現して居ります。その後は急に少くなり、小學校入學の頃には五十パーセント前後となり、尋常四年頃になりますと、三十パーセント臺に降つてしまひます。これによつて見ましても、幼兒期の子供らが、如何に玩具に憧れてゐるかゞ判るでありませう。

繪本を欲しがる心は、玩具を欲しがる心よりもやゝおくれて現れますが、その代り長く續き、小學校時代に入つても相當強く現れて居ります。

かやうな欲しがる心が本になつて、いろ〳〵のものを集めるといふ、いはゆる蒐集本能

が次第に目覺めて參ります。特に女兒にこの傾向が強く、色紙・布切れ・貝殼などを集めたがるやうになります。

私の調べた結果によりますと、色紙を集めてゐる女兒は、滿四歳で既に七十パーセントといふ割合を示し、その後次第に殖えて、六歳半では八十八パーセントに達しますが、小學校入學後は、次第に減つて來るやうであります。

布切れを集める女兒も、四歳では五十五パーセントを示し、その後次第に殖えて、六歳半には七十八パーセントに達し、その後は、やはり、次第に減つて來るやうであります。

貝殼を集める女兒は、四歳では二十パーセント位しか現れませんが、その後急激に增加して、六歳半では五十三パーセントに昇り、その後は急に減つて參ります。

男の子の方は、かやうな集めたがる本能は、比較的少いやうでありますが、その中でも、女兒と同じく、色紙を集めたがる子供が、比較的多く、四歳ですでに五十七パーセントといふ割合を示し、その後更に增して、五歳半では六十三パーセントに達して居ります。

その後やはり、次第に減つて行くやうであります。

色紙に次いで、男の子の集めたがるものは、エハガキ・ガラス玉・貝殼などでありまして、五歳から五歳半頃にかけて、大體四十パーセント前後の割合で現れて來て居ります。

かやうな蒐集本能も、これを適當に指導してやりますと、知らず〳〵の間に、各方面の知識を、樂しみながら習得するものでありまして、例へば、動物や、草花のエハガキを集めてゐる間に、それらの種類の分け方を知るとか、小學校時代の子供になりますと、外國の切手を集めてゐる間に、いろ〳〵の國の名前を覺えるとか、木の葉や、昆虫を集めてゐる間に、その種類や特徴を獨りでに觀察し會得するとかいふやうなことがそれであります。

從つて、たゞ雜然と集めるだけでなしに、その集めたものを、適當に分類整理するといふ態度を、幼い時から植ゑつけておくといふことは、大きくなつてから、研究・調査・整理といふやうな仕事にたづさはる時の、しつかりした心の持ち方の土臺を築くといふ點から見ても、極めて必要なことのやうに思はれます。

試みたがる本能　幼兒は、言葉の發達するにつれて、いろ〳〵のことを聞きたがるところの、いはゆる質問慾を現して來るものであるといふことは、すでに述べて來ましたが、それとゝもに、玩具をこわして中を調べてみたり、包物を開いては中味を改めてみたり、抽出を引いては中の物をかき廻してみたりするところの、何でもやつてみるといふ、試みの本能、或は實驗的興味といふものが、次第に現れて參ります。

これらは、新しいこと、珍しいことを好むといふ好奇本能の現れでありまして、又一面知識慾の現れとも見ることが出來ます。この知識慾の芽生えを、たゞ單に、子供のいたづらとして抑へつけてしまふといふことは、子供の心の發達に對して、よくない影響を及ぼすものでありますから、親はよくこの點に注意して、その指導を誤らないやうにしなければなりません。

幼兒の實驗的興味の種類について、私の調べた結果によりますと、男女を通じて、最も多く現れる行動は、「包んであるものをほどいてみる」といふ試みであります。滿四歲の幼兒においては、男兒が七十八パーセント、女兒が七十五パーセントといふ割合を示し、その後次第に減つて、小學校に入る前には、四十パーセント前後になつてしまひます。

その次は、男の子の「玩具をこわしてみる」といふ試みで、これは四歲の頃には六十五パーセント位の割合で現れますが、その後は次第に增加して、五歲半では七十パーセントとなり、それから後は、急に減つて行くやうであります。女の子の方は、この試みがやゝ少なく、四歲では四十五パーセントを示すだけに止り、しかもその後は更に減つて、六歲では三十八パーセントしか現れて居らず、小學校入學後は急激に減つて參ります。

これに反して、「抽出を開けてみる」といふ試みは、男兒よりも女兒に多く、四歲では六十五パーセントを示し、その後次第に減つて行きますが、男兒の場合は、四歲で五十二パーセントしか現れず、その後はやはり次第に減つて參ります。

その他極めて少數ではありますけれども、「とんぼのしつぽを切つてみる」とか、「タバコを吸つてみる」とか、「人のいやがるものをわざと食べてみる」といふ物好きなことを試み

たがる子供らも、十パーセント内外現れて居りますが、これらは皆、新しいことを知らうとする本能の働きでありまして、何も子供に、特別な目的とか、意地悪とかゞあつてするのではありませんから、若しそれが、タバコを吸ふとか、惨忍性を植ゑつけるとかの、悪い習慣に陥るやうな心配のある時には、次第にそれを改めるやうにしなければなりませんけれども、さうでもなければ、出來るだけ實驗的態度を向上させる意味で、かういふ試みを片端から叱りつけてしまふといふことは、家庭教育上大いに考へなければならぬことゝ思ひます。

同情　幼兒は、年齢の進むに從つて、次第に、遊び相手を求めたがるやうになるものであるといふことは、前に述べましたが、それは、とりもなほさず、他の人々といつしよに居りたいといふ社會的な本能の現れであります。

友達といつしよにゐたがる傾向の現れてゐる子供の割合について、私の調べた結果によりますと、女の子にそれが最も多く現はれ、四歳の子供の八十パーセントまでがその慾求を現し、その後次第に增して、六歳半頃には、九十四パーセントといふ高い割合を示して居ります。

男の子はこれよりもやゝ少ないけれども、それでも四歳で七十パーセントを示し、その後次第に增して、五歳半では九十一パーセントに達して居ります。

仲間といつしよに遊びたいといふ慾望の現れる頃には、自分の氣持をもつて、相手の氣持を察するといふ同情の心が、本能的に目覺め始めます。

他の子供の泣いてゐるのを見て、可愛さうだといふ表情を表し、或は自分もいつしよに泣くといつたやうな同情心の芽生えが、各年齢の幼兒において、どんな割合で現れて來るかといふ點について、私の調査した結果によりますと、女の子には比較的多く現れるものであります、四歳では八十パーセントを示し、その後少しづゝ增加して行つて居ります殊にこれは、他の本能のやうに、小學校入學後急に減ずるといふことがなく、永く續くところの本能であります。

男の子は、初は比較的少なく、四歳では六十五パーセントしか現れて居りませんが、その後急に增加して、六歳半では、ほとんど女兒に近くなり、その後の傾向も大體男兒と同樣であります。

その他、犬の怪我したのを見て同情するとか、人形のこわれたのを見て同情するといふやうな表情や態度なども、幼兒期の中頃から終りの方へかけて、著しく發達して參ります。

かういふ時期には、やはり、多くの子供らと交はらせて、この自然に現れて來る同情心の發達を、促すやうな方法をとることが、家庭教育上大切であります。一人子に、とかく冷酷な子が出來るといはれますのも、かやうな同情心を發露させるべき大事な幼兒期に、兄弟間の同情心を表すべき適當な機會が與へられなかつたといふことにもよるのでありますから、一人子をもつ親は、特にこの點に留意して、出來るだけ遊び相手を作つてやるやうに努める必要があります。

お山の大將氣取り　幼兒は、仲間と遊びたいといふ社交的本能をもち、仲間の困つてゐるのを見て同情するといふ本能を現しますとゝもに、他方においては、仲間を支配し、お山の大將氣取りをしたいといふ統率本能を示すこともまた、自然の慾求であります。

これは、一面から見れば、威張りたがる心の芽生えともなるのでありますが、他面また人に褒められることを喜び、名譽を重んじ、競爭を好むといふ心の土臺ともなる、本能の働きでありますから、これを適當に發達させるといふことは望ましいことであります。

褒められて喜ぶといふ態度について私の調べた結果によりますと、幼兒期を通じて、男の子は八十五パーセント前後、女の子は八十パーセント前後といふ高い割合を示して居ります。

この強い本能を利用し、子供の自尊心を重んじて指導するといふことは、非常な効果をもたらすのでありまして、子供に何か仕事をさせようとする時、よく「お惘巧さんネ」といつて、おだてゝやることがありますが、さういふ時、子供がどんなに喜んでそれを成しとげるかは、子供を取扱ふ者の誰でも知つてゐるところであります。そしてその仕事を成

し終へた時、「よく出來ましたネ、ほんとうにお利巧さんでしたネ」といつて褒めてやりますと、子供は得意になつて、もつと〳〵やりたいといふ態度を示すものであるといふこともまた、よく知られて居ります。

このおだてに乘る氣持を適當に利用して、「あなたに、それがきつと出來るのだ」といふ強い暗示を與へた結果、ずゐぶん幼稚園でもて餘してゐた、亂暴な、やんちやな我がまゝな子を、見違へる程の良い子に轉換させることの出來た、私の教育的治療法の實驗例などから考へましても、このお山の大將氣どりの強い統率本能または優越本能、或は名譽心といふものを、適當に利用するといふことは、家庭教育上非常に大切なことのやうに思はれます。

殊に後に述べるやうな、劣等生や低能兒などの指導において、往々親も教師も、この子供の自然の力を無視して、自分は駄目なものだといふ劣等感に襲はれるやうに仕向けてしまふために、折角伸びようとする天分をもみす〳〵踏みにじつてしまふといふことも、しば〳〵起るものでありますから、特にこの點は、お互に深く反省してみなければなりません。

第十講　幼兒の一般的特色と家庭教育

一　智能の現れ

幼兒の特色の概觀　乳兒時代をすぎて、幼兒の時代に入ると、先づ言葉を使ひ始める、繪を畫き始める、歌を歌ひ始めるといふやうに、次から次へと、今までに現れなかつた、いろ〳〵な心の働き方が、はつきりと外に現し出されるやうになつて參ります。殊に遊びに熱中してゐる間に、何時とはなしに、その心やからだを練り鍛へて行くといふことが、幼兒の時代における最も著しい特色でありまして、幼兒期は結局、遊戯時代であるといつてしまつてもいゝ程であります。

遊ぶといふ働きは、子供が生れながらにして與へられた本能でありまして、この本能が幼兒期において特に盛んであるといふことは、やがて、幼兒期は、本能の働きの最も盛んな時代であるといふことにもなるのであります。事實、今まで述べて參りました、私の、多數の幼兒及び學童について調査した本能の研究結果から見ましても、幼兒期の中頃から終り頃にかけて、各種の本能の現れが、最も著しいものであるといふことを、それ〳〵の本能についての統計的な數字が證明してゐるのでありますから、一層この感を深からしめるものであります。

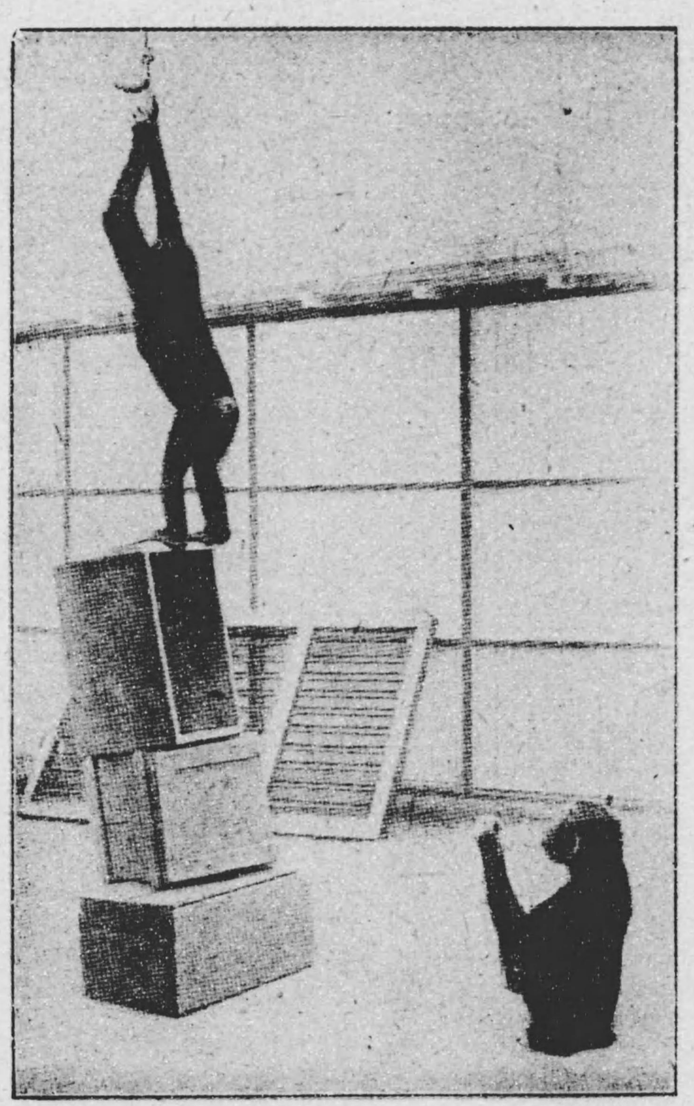
本能は、最も適當な運動の仕方で、最も容易に、その子供の生命の保持發達に役立つやうに、絶えず繰返し〳〵働くところの、生れながらの働きでありますが、この他に、幼兒期に入る頃から、突然現れて來るところの、特別な、生れながらの働きのあることに、誰しも氣がつくであります。それは、何か必要に迫られた時だけ、極く稀に、ひよつこりと働きかけるものでありまして、その目的と手段とをうまく結びつけて、新しい解決法を發見して行くところの、特別な心の働きであります。通例賢さとか、悧巧さといはれるところの、智能の働きがそれであります。この智能の芽生えといふ突然の變化は、乳兒期か

5幼児期へ通り抜けようとするところの、幼児の時代に現れる、大事な一般的特色の一つであります。

その他に、自己または自我感情に對する目覺めが現れて來て、著しく自己中心的な心の働き方を現すに至るものであるといふことも、幼児期の大事な一般的特色の一つとして、見逃すことが出來ません。そこでこの智能と自己中心性との二つの特色について少しく述べてみることにいたします。

洞察の力　飲んだり、食べたり、遊んだりして、その日〳〵を送る幼な兒にはほとんど考へるといふ必要がなく、たゞ本能の命ずるがまゝに動いて行けばよいのでありますが、どうかすると、自分の慾望とか、目的とかを達するために、何かしら考へるやうな樣子をしてゐるなと見る間に、突然妙案でも浮んだらしく、運動を始めると、間もなく、うまうまとその慾望なり、目的なりを達するところの、立派な手段を講ずるといふやうなことが時々見うけられます。

猿の洞察力



220—221

このことについて、ドイツの兒童心理學者ビエーラーは生後十ケ月の幼兒が、遠い所においてあるビスケットを手に入れようとして、そのビスケットに結びつけられた糸が、手近に來てゐることに氣がついて、その糸を引けば、ビスケットが引寄せられるものだといふことを發見することが出來たといふ實驗例をあげて、かやうな智慧は、普通生後十ケ月乃至一年の頃から現れ始めるものであつて、丁度チンパンヂーといふ、人間に最も近い種類の猿即ち類人猿に現れると同じ程度の智能であるから、この頃の幼兒の時代を、チンパンヂー時代と名づけてもいゝと述べて居ります。

類人猿については、ドイツの心理學者ケーラーが、いろ〳〵の實驗を試みて居りますがその一例として、チンパンヂーが、高い所にぶら下げられてゐるバナヽを手に入れようとして、その傍にあつた箱を引きづり出して來て、それを重ねた上でその上に登り、とうとうそのバナヽを手に入れたといふ實驗例をあげて、この場合のチンパンヂーのやり方は、犬や猫のやうに、前後の考へもなしに、何遍も〳〵、いろ〳〵の試みをやつては失敗し、

失敗しては又やり直すといふことを繰返してゐる間に、偶然の機會から、その食べ物を手に入れるといふやうな、さやうな繰返しとか、訓練とかいふやり方をせずに、むしろ、ちつとして、しばらく何事か考へるやうな樣子を見せてゐるかと思ふと、やがて突然箱の側へ出かけて行つて、それを引づり出し、それを重ね、それに登るといふやうに、その目的と手段との關係を、うまく考へ當てるところの、洞察力を働かせて、その目的を達するものであつて、この力が即ちほんとうの智能であるといふことを述べて居ります。

ビューラーのやうな、特別の實驗をやれば、幼兒の智能的な活動を、生後一年前後のところで觀察し得るわけでありますが、日常の生活に現れる、自然の狀態を觀察しようと思へば、やはり一年三ヶ月以後の、歩き出していろ〳〵の活動を始めるやうになつてからでないと、なか〳〵觀察の機會を捕へ難いものであります。

私は偶然にも、私の長男の滿一歳七ヶ月の時に、丁度ケーラーの發見したチンパンヂーの智能の働き方と同じ形の、幼兒の智能の現れ方を、始めて發見することが出來ました。

それは、部屋の片隅においてある高さ三尺程の茶箪笥の上に、飴の入つてゐる鐵が載せられてあるのを見つけて、それを手に入れようとした時の彼の行動によつて示されたものであります。初め彼は疊の上に立つたまゝで下から手をさし延べたのでありますが、到底屆くべくもありませんので、手を引込めて、しばらくあたりを見廻して居りましたが、少し離れたところに、食卓がおかれてあるのに眼がつくと、大急ぎでその食卓を引きづり出し茶箪笥のすぐ下まで運ぶと、今度はその食卓の上によぢ登つて、その上に立ち、手を伸ばしてやす〳〵とその鐵を手に入れたのであります。かやうな方法は勿論誰も敎へたことがなく食卓に登るといふことも、未だかつてやつてみせたこともなければ、彼自身でもやつてみたことのない行動であります。

かやうにしてチンパンヂー時代に入つた幼兒は、チンパンヂーよりも、もつと〳〵速い速度で、その洞察力又は智能を發達させて、一層人間らしい働き方に近づくのであります

智能檢査法　かやうな智能の働きは、その幼兒の生れつきとして、親代々から與へられ

たものでありまして、その賢さの優劣とか、發達の程度とかいふものは、一定の學問的な方法で、はつきりと檢査することの出來るものであります。いはゆるメンタル・テストといふのがそれでありまして、その中でも、特に智能テストと呼ばれる方法が、直接にこの智能を檢査するところの方法であります。

この檢査法は、二十世紀の初めに、フランスのビネーといふ心理學者がまとめて發表いたしましてから、ビネー・テストといふ名稱のもとに、世界各國で行はれるやうになり、我が國でも多くの學者によつて、その飜譯や、改定法が作られました。私もその一種を研究して、既に發表いたしましたが、これらの方法は、相當にその手續が六ケしいので、一般家庭で實用に供するのには、いさゝか不便なところがあるだらうと思ひまして、別に、大體の傾向を知ることに役立つところの、新しい簡易智能テストといふものを作りまして附篇第十九講に、その實際のやり方を詳しく述べておきましたから、それを參照されるやうにお奬めいたします。

二　自己中心性

我がまゝ　子供は我がまゝなもので、食べたいといふ慾望でも起ると、食べさせてもらふまでは、駄々をこねて止まないものであるといふことは、誰でも知つてゐるところであります。これは他の人の氣持とか、言ひつけとかいふことを、考へることが出來ず、たゞ自分のことだけしか考へられないところの、自分本位とか、自己中心とかいふ心の特色から發するものでありまして、すべてのものは、自分の考へるまゝになるものだと考へる、子供の心の自然の傾きであります。

されば、人形も自分と同じやうに、御飯を食べるものだと思ひ込んで、人形の口へ御飯を押しつけてみたり、犬も自分と同じやうに話すものだと思ひ込んで、犬に話しかけたりするといふことが、しば〳〵起るものであります。

かやうに、すべての事は自分と同じやうなもの、自分の思ふやうになるものと考へてゐ

るところに、子供の我がまゝといふものが生れ出るものでありますが、かやうな我がまゝは、言葉を使ひ始める頃からだん〳〵現れて來るものであるといふ點から考へて、幼兒期の初からつきまとつてゐる根本の特色といつていゝでせう。例へば、母が土瓶から茶碗へ水を注いでゐるところでも見ようものなら、早速母の手にしがみついて「坊やが、坊やが！」と喚きたてゝ、自分にさせろとせがみます。かやうな時、「こぼすから駄目だ！」とか何とかいつて、それを止めさせようとしても、なか〳〵聞き入れず「坊やが〳〵」を繰返し、はては「アー〳〵」と泣き叫んで、何でもかんでも自分の思ひを通すまでは止めないといふ場面をしば〳〵見うけるものであります。

言葉を使ひ始める頃から、子供はよく獨り言を言つてゐることがありますが、これなども、他の人に聞いてもらはうとか、解らせようとかいふ氣持がまだ現れずに、たゞ自分でしやべりたいからしやべつて自分で滿足してゐるといふ自己中心的な心の働きから來るものでありまして、獨り遊びをしたがる幼兒の心なども、やはりこの自己中心性の現れと見ることが出來ます。

反抗　かやうな我がまゝの心が、單に人のいふことをきかないで、自分の思ひを通すといふことだけでなしに、人に向つて、その氣持をぶつゝけて來ることがあります。何かいふとすぐ「イヤァ！」といつて、口ごたへをするといふ態度がそれであります。

私の長男の觀察記錄で申しますと、滿一歳九ヶ月目に、始めてこの反抗の傾向を認めることが出來ます。それは、「一つ・二つ・三つ」といふ勘定を口ずさんでゐる時、たまたま誤つて、「一つ・三つ」と云つてしまつたので、側で聞いてゐた母親が、「ォヤちがつた、一つ・二つ・三つといふのでしたネ」といふと、彼はわざと「一つ・三つ」と數へ、「ォヤ又ちがつた」といふと、彼はわざと大きな聲を張り上げて「一つ・三つ」と言ひのけてしまつたのであります。

然し、その後獨り言のやうに、自分だけで數へる時には、ちやんと「一つ・二つ・三つ」と正しく數へてゐるのでありますから、決して「一つ・三つ」と覺え込んでゐるのではな

くして、たゞ子供が自分で思ふ通りに言つてみたい氣持でゐるところへ、大人が干渉したものでありますから、どこまでも自分の思ひを通したいといふ我がまゝから出て來たところの、一種の反抗的な自己中心態度の現れにすぎないのであります。

こんな時、強いて直さうと思つてあせると、かへつて子供の反抗心をそゝるだけで、何等得るところがなくなるものでありますから、それからしばらくの間、數へることについては、絶對に母から口を出さないやうに、その問題にふれさせないやうにして居りましたところ、一ヶ月ばかりたつ間に、何時の間にか「一つ・三つ」といふ茶々氣分の數へ方をすつかり忘れてしまつて、何時聞かれても、正しく「一つ・二つ・三つ」と答へるやうになりました。

ところが、一歳十ヶ月目から、今度はしきりに「イヤ！」といつては反抗することを試みるやうになり、更に「おしつこは！」といつてきくと、「ナアイ」といつて斷つておきながら、しばらくすると自分で「おしつこ！」と催促しますので、女中がやつてやらうと思つて近づくと又「ナアイ」といひ、こんなことを二度も三度も繰返しては大人のいふことに反對するといふ働きが現れるやうになつて參りました。

この頃母親が「ピョ〳〵ひよこが、かあちやんとねんね」といつて聞かせると、彼は大聲を張りあげて「とうちやんとねんね」と、母親と反對のことを言つては自分の思ひを通すといふことが現れて參りました。

これらは皆、子供が自分の思つたことを中心にして、すべてのことを考へかつ行はうとする、自己中心的な特色から出て來るものでありますから、この時期の特色を無視して、何でもかんでも大人のいふことに從はせようとすることは、子供の自然の發達の順序に添はない無理な導き方となるために、かへつて、反抗心を強めすぎたり、ひねくれた氣持を植えつけたりして、良くない結果を來すことにもなるのでありますから、出來るだけ、子供の心の發達の時期々々に應じた、自然の導き方を重んずるといふ方針で、家庭教育に臨んで頂くことが最も望ましいことであります。

今まで食べたい、飲みたい、遊びたいの本能のまに〳〵、我がまゝ勝手な生活を續けてゐた幼兒が、知りたい、學びたい、仲よくしたいといふ新しい慾望にかられて大勢の子供らと仲よく生活して行かうといふ態度を表すやうになるといふことは、子供の心の發達における大きな變化であります。幼兒から學童へといふ移り變りは、この心の變化を基にして現はれるものであつて、世界各國が、滿六歳をもつて學齢期と定め、この頃からいよいよ家庭生活から離して、學校生活といふ新しい生活環境の中に入り込ませようとしてゐるのも、この子供の心の自然の發達順序に則つたものであります。この幼兒から學童へといふ變化に就いては次の講において詳しくお話いたします。

下篇　學童の心理と家庭教育

第十一講　學童の特色と家庭教育

一　學童の心理的特色

遊戯から學習へ　幼兒から學童へといふ大きな變化の一つとして現れるものは、遊びに夢中であつた子供の心の中に、文字を讀むとか、數をかぞへるとかいふ新しい事を學ばうとする態度が强く現れ、一度學んだ事を永く記憶する働の盛になることであります。

然しかやうな心の變化は突然起るものではなくて、丁度夜がほの〴〵と明け初める時のやうに、何時とはなしに、遊び中心の時代から、學び中心の時代へと移り變つて行くものでありますから、小學校入學と同時に、今までの遊びを禁じて、おさらひなり勉强なりに熱中させようとすることは、子供の自然の發達に添はない、無理な導き方であることは言ふまでもないことであります。

されば、小學校の一年生あたりの子供では、學ぶといふ心は相當芽生えて來てゐるにしても、その全體の生活といふものは、まだ〳〵遊びを中心として、學びをそれにつけ加へるといふ程度の段階にしか達してゐないものと思はなければなりません。二年三年と進むに從つて、次第に遊びの程度が減じて、學びの程度が增し、四年生頃からは學びが中心となつて、遊びが副となるといふやうに、徐々に發達して行くものであります。

然し、いくら學び中心になるからといつても、上級になつたら遊びを止めてもいゝといふのではなくして、やはり、遊びといふことは常に學童の生活にはなくてならないものであります。この理窟を無視して、子供から遊びを奪ふならば、前にあげた尋常六年の亂暴な男の子の例のやうな結果になるのであります。

衝動から意志へ　食べたいと思へば直ぐ手を出し、遊びたいと思へば直ぐ飛出してしまふといふやうに、前後の考へもなしに、その場〳〵の氣分なり、慾望なりのまゝに行動することを、衝動的な行動と名づけるのでありますが、幼兒の行動には、かやうな衝動の働きが非常に多いものでありまして、その點で幼兒の生活は、動物の生活に最も近いものであるといつていゝでせう。

然るに、學童期に入りますと、かうしてはいけない、あゝしてはいけないといふことを次から次へと、教師や、學友から教へられるやうになります爲、何かしようと思ふ時でもすぐに普段教へられてゐることが、心の中に湧いて來て、かうしてはいけないのぢやないかしらと、一應考へ合せて、それから事を行ふといふ、愼重な態度が現れて參ります。かやうな心の態度を意志の働と名づけるのでありまして、子供が、動物的な生活から脫け出して、一層人間的な生活へと入り込むのも、この意志生活が現れて來るからであります。

例へば、遊びたいといふ慾望が出た時などでも、すぐ飛び出すといふことをせずに、先づおさらひを濟まして、それからといふ氣持がすぐ心の中に湧いて來るなどは、學童期に入つて、絕えず働きかける子供の意志生活の一面であります。

何か目的を定めると、それを實現する爲に、いろ〳〵の困難と戰ひながら努力するとい

ふ働きも、やはり意志の働きであつて、早寢、朝起、規律、整頓などゝいふ、いろ〳〵の躾も、かやうな努力なり、意志なりの働きが、次第に發達して來る爲に行はれるものでありますから、意志生活に入り始めた學童期は、かやうな躾とか、習慣とかを作り上げて行くのに、極めて大切な時期であるといはねばなりません。

個人から團體へ　幼兒は著しく自己中心的で、我がまゝで、利己的なものであるといふことは、前にも述べて來ましたが、小學校に入るやうになりますと、子供等は、同じ年頃の多數の學友と交らなければならず、然もそれらの友達は、皆それ〴〵自分勝手な慾望を出し合ふのでありますから、自然そこに、各自の慾望の衝突が起り、今まで家庭で押通して來たやうな我がまゝが、すら〳〵と通らないものであるといふことを、何時とはなしに敎へられるやうになつて來ます。この學友同志の自然の制裁と相俟つて、他方では子供の心の自然の發達の順序として、皆一緒に遊びたいといふ社會本能が、この頃の子供の心の中にます〳〵強く目覺めて參ります爲に、學童期の子供等の心といふものは著しく社會的な、團體的な働き方をするやうに特色づけられて來るものであります。

この特色は、中學年から高學年へと進むに從つて、いよ〳〵盛となり、小學校上級の子供等になりますと、仲間同志で決めた約束といふものを、非常に重んじて、時には親の命にさからつてまでも、クラスの者同志で誓つた秘密は絶對に守るといふやうな、固い決心さへもつに至るものであります。

更に進んでは、最も大きな團體であるところの、社會とか、國家といふ團體の爲に、自分の慾望を犧牲にしてまでも盡さなければならないものであるといふ氣持を抱くやうになり、國を守る爲にどうしても澤山の飛行機を作らなければならないといふやうな話でも聞かされると、非常に感激して、自分の食べることや遊ぶことに費してゐた小遣錢を極度に節約して、國防飛行機の資金にといつて、可憐な献金を申出るといふやうなことも、この學童期の中頃から現れる特色であります。

物慾から理想へ　學童期への移り變りを物語る精神上の變化について、學者の間には、

いろ〳〵の意見が行はれて居りますけれども、私が多數の幼兒及び學童について實驗的に研究した結果から發見することの出來た新しい見地は、子供の好き好みとか、興味とか、理想といふものに現れるところの、この二つの時期の間の、發達上の著しい變化といふことであります。

第二十講で詳しく述べてゐるところの、私の興味型テストを、多數の幼兒及び學童に適用した結果、小學校入學以前の幼兒の興味は、食べるとか、集めるとか、遊ぶとかいふやうな、著しく物慾的、身體的な興味においてすぐれて居りますが、小學校入學後の學童はこれに反して、新しいことを知るとか、友達の爲に盡すとか、神佛にお參りするとかいふ精神的な慾望、或ひは理想といふものに對して、强い興味を感ずるものであつて、この物慾から理想へといふ變化は、小學校入學といふ一時期を境として、一大轉換を來すものであるといふことが、はつきりと統計の數の上に示されたのであります。

性能の分化　生れたばかりの赤ちやんは、どの顏を見ても皆同じやうな格恰をしてゐるけれども、年月のたつに從つて、次第々々にその子供獨特の顏貌を現し、小學校時代になると一層その子供の特色がはつきりして來ると同じやうに、心の働も、幼ない時には、餘り大した違ひを示さないやうに見えるけれども、年月のたつに從つて、悧巧な子供はその悧巧さを益々發揮し、內氣な子供は一層その特色を現して來るといつたやうに、その子供の長所短所といふものを、はつきりと表出するやうになります。

例へば、幼稚園時代には何も特色のない平凡な子供だと思つてゐたものが、小學校に入るやうになつてから、だん〳〵繪の天分を發揮して、親や教師を吃驚させるやうな繪を描くやうになつたなどゝいふ例がそれであつて、これは、學童期に入るやうになつてから、子供の心の働き方が、いろ〳〵の方面に分化して來たことを物語るものであります。

二　學童の家庭教育方針

善く遊び善く學べ　學童期の子供の特色が解つたならば、今度はその特色に應じた、最

も適切な指導を加へて行くといふことが必要になつて參ります。この點について今少しく家庭教育の方針といふ立場から、お話を進めてみようかと思ひます。

先づ、遊びから學びへといふ心の發達の移り變りの時期であるといふ點から見て、小學校の低學年殊に一年生あたりの子供は、遊びを主とし、學びを副とする位の方針で導くことを以て、家庭教育の主眼としなければならぬと思ひます。學校教育でさへも、近頃「學習の遊戯化」といつて、低學年の教育方針は、出來るだけ遊戯の形で行はれなければならぬと主張される程でありますから、家庭としては尙更のこと「善く學び善く遊べ」といふ前に先づ「善く遊び善く學べ」の方針を以て臨まなければならぬことゝ信じます。

善く學び善く遊べ　三・四年生の中學年時代になりますと、幼兒期の名殘りであつた遊戯本能が次第に退化して、知識慾が一層盛んとなり、學ばうとする態度がいよ〳〵根强く張られて、雜誌やら、童話本やら手當り次第讀み耽るといふ著しい心の變化が現れて參りますと同時に、他方において衝動生活から意志生活へと入り込むところの、努力の態度も現れて參ります爲に、一定の目的を定めて勉强するといふ學びの生活が中心となり、遊びの生活がその副となつて參りますから、この頃の教育方針を、始めて「善く學び善く遊べ」といふモットーに換へるといふことは、最も自然な導き方であり、又子供の心理に適した方針であります。

そしてこの方針は、五・六年の高學年になつても、又はそれ以上の中等學校に進んでも常に變らないところの大方針でありますから、やゝもすれば多くの家庭で陷るところの、中等學校入學の準備教育の爲に、五・六年頃になると、急に詰込みに熱中して、子供の生活から遊びを奪つてしまひ、徹頭徹尾「善く學び善く學べ」で押通さうとするやり方は、家庭教育においても、はた又學校教育においても、決して褒めた方針ではありません。

眞い樹　立派な子供を育て上げようとすれば、その幼兒の頃から、良い習慣をつけるやうに、その土臺を築いておかなければならないといふことは、前にも述べましたが、この立派な土臺の上に、更に立派な建物を築き上げるところの時期が、この學童期であります

から、この時期は、家庭教育上ゆるがせにすることの出來ない大事な時期であります。幼兒の頃から作り上げて來たところの、早起の習慣、自分のことは自分でやるといふきまり、清潔、整頓の躾など、何れもこの學童期において完成されるのであります。

これは子供の意志の發達の順序から見ても、最も習慣の作り易い時期でありまして、若し不幸にして、この學童期において、買食ひとか、夜遊びとか、うろつき廻りとかいふ悪い癖をつけてしまひますと、これを取去るのに非常な困難を感じます。中には、この時期に築き上げられた悪い習慣が、とう〳〵拔け切らないで、だん〳〵悪いことを覺え、おしまひには不良少年不良少女に墮落してしまふといふ悲しむべき運命に陷るものも少なくはないのであります。

でありますから、この學童期において、早くから困苦艱難に堪へ、これを切拔けて、正しい目的に精進するといふ意志の習慣を築き上げておくことが、極めて大切なことであります。いはゆる立志傳中の人々の成功の最大の原因が、その少年期において、貧苦と戰ひ、艱難に打勝つて、獨立獨歩の氣象を養つて來たところに存するものであるといふことを知つたならば、われ〳〵は學童期の子供の家庭教育の如何に重大であるかを痛感せずに居られないでありませう。

無理は禁物　困苦艱難に堪へ忍ぶといつても、子供のからだや心の働きに負ひ切れないやうな、無理な重荷を負はせるといふことは、勿論控へなければなりません。若し子供の身心の働きの限度といふことを忘れて、無暗やたらにこれを苦しめるならば、子供は疲れ切つて、再び起つことが出來ないやうになつてしまふのです。かやうな無謀な指導に陷らないやうにする爲には、斷えず、子供の心やからだの發達といふことに注意すると同時に、その生れつきについても充分審査した上で、子供の力相應の負擔を與へるといふ方針で導かなければなりません。

からだに無理をすれば、すぐ疲れるとか、へたばるとかいふ形で、外に現れて來ますから、家庭でも學校でもこの方面の無理を子供に强ひるやうなことは、めつたにありません

けれども、心の方面の無理といふものは、すぐその場で、てきめんに現れて來るとは限らないものでありますから、やゝもすれば、親も教師も、それと氣づかずに無理をして、後になつてから始めて、それと氣がついて後悔するといふことが起り勝ちなものであります。その弊害の最も著しいものは、何といつても、中等學校入學準備の、いはゆる試驗地獄であります。

かつて教育相談所で取扱つた試驗地獄の慘ましい犧牲に次のやうな實例があります。それは競爭の激しい中學校を受驗するについて、果してそれだけの生れつきがあるかどうかを診斷してもらひたいと云つて來た二組の母子の例でありますが、いろ〳〵心理學的檢査を施した結果、その一方は充分その中學校を受けるだけの資格をもつて居りますけれども他方はどうも餘り生れつきが良くないので、ずゐぶん無理だといふことが判りました。そこで私は、私の診斷の結果を、正直ありのまゝにお話してやつたのでありますが、後になつて、優秀な子供の母親から夫のやうな事實を聞かされたのであります。

私の診斷を受けて歸る途々、その無理だらうといはれた方の母親が、非常に憤慨して、きつとこの子を中學に入れて見せると力み返つて居られたさうですが、それからといふもの、豫習だ、復習だ、準備書だ、家庭教師だと、ありとあらゆる方法を盡して、その子供に詰込んだお蔭で、とう〳〵その子供は、優秀な子供と共に、見ん事その中學校に入ることが出來たさうであります。その時のその母親の得意や思ふべしであります。けれどもその喜びも束の間、入學後次第々々に健康が勝れなくなり、時々學校を休むといふことになつて、とう〳〵一學期も終らないうちにその子供は肋膜炎を患つて學校を中止しなければならないことになつたのであります。

この母親は、中學校に入れることだけに熱中して、入つてからどうなるかといふ先の先まで考へるだけの餘裕がないばかりでなく、子供の心とからだとには、その生れつきによつて、一定の限りといふものがあるものだといふことを私から説明してやつても、それを受け容れるだけのゆとりさへもなかつたのであります。ほんとうに無理は禁物であるとい

ふことを、われ〳〵はこの愚かな母親の實例から訓へられなければなりません。

特色の發見　子供は小學校を卒へたならば、何でもかんでも中學校へ入れなければならないといふ法はないのであつて、むしろ、その子供の生れつきに應じた進路のきめ方をすることが、一番子供の幸福になることであり、又世の中の爲になることであります。このことについては、第十五講及び第十六講において更に詳しくお話いたしますが、とにかく、小學校時代には、前にも述べたやうに、學童の特色が次第々々にはつきりと分れ始めて來るのでありますから、その特色を正しく觀察し、かつこれを記錄しておいて、後々の學校選擇や、職業選擇の大事な參考にするといふことを、家庭として充分心がけて頂かなければなりません。

不眞化の用心　今日の家庭教育は勿論、學校教育でも、社會教育でも、一番手を燒いてゐるのは、少年少女の日一日と不良化して行くといふ問題でありまして、これは正に國家の重大問題であるといつてもいゝ程、年々歲々その數を增し、他の多くの親を、教師を、そして當局者を惱ましまし續けてゐる悲しむべき事實であります。

かやうな不良少年少女の多くは、後に第十七講で詳しく述べますやうに、その生れつきにおいて、うつかりすると不良化し易いといふ心の缺點をもつてゐるものでありますけれども、然しその缺點といへども、家庭教育さへしつかりして居れば、充分正し得るものであります。こうしてみますると、かやうな不良兒を作るに至る最大の原因は、とりもなほさずその子の家庭教育の缺陷といふことに歸せしめなければならないのであります。

然らば、不良兒を出さないやうにする爲には、各家庭は何歲頃の子供の教育について最も深い注意を拂はなければならないかといふに、それは絕えず注意しなければならぬ問題ではありますけれども、特にその中でも、この學童期が一番大切な時期であるといふことが、次に示す私共の研究の結果が、最も雄辯に物語つて居ります。

私共が多數の犯罪少年について調査いたしました事柄の中で、特に、始めて不良な行ひをした年齡が何歲頃かといふ點に關する研究の要點だけを申上げますと、最も多い犯罪は

やはり盗みでありまして、それは多く、幼い時からの買食ひの惡い癖から出發して、ついにお金がない爲に、店先のお菓子なり、果物なりをかすめとるといふ恐しい犯罪を犯すにいたるものであります。

かやうな買食ひの癖が何時頃から始まつたかは、今になつてそれを精しく調べることは困難でありますけれども、他所の物を盗むやうになつた時の年齢は、充分調べることが出來ます。その調査の結果によりますと、百人に一人位の極く僅かの割合ではありますけれども、既に五歳でもつてかやうな恐しい盗みをやり始めたといふ不良少年があげられて居ります。六歳・七歳と年齢の進むに從つて、少しづゝその割合を増して行つて居りますが、八歳になると急に多くなり、約九パーセントといふ割合を示し、其後ますゝ殖えて十一歳で十二パーセントとなり、十二歳では最も多く、約十五パーセントを示し、その後は次第に減つて行きます。

これで見ますと、十二歳の頃に始めて盗みがばれ出したといふ不良少年が最も多く、十一歳及び十三歳がこれに次ぎ、この十一歳から十三歳までの三年間だけで、全體の三十八パーセントを占めて居ります。そして十四歳から十八歳に至る五年間の合計が二十八パーセントに過ぎないのに對して、十歳以下の幼少な時期に盗み始めたといふ不良少年が、三十四パーセントの多きに達するといふことは、學童期といふ時代が、如何に不良少年を作り易い時代であるかといふことを雄辯に物語る事實であります。若しこれを十三歳以下と十四歳以上との二組に分けるならば、十三歳以下の學童期において、犯罪を犯し始めた者が、全體の不良少年少女の七十二パーセントを占めるといふことになり、從つて不良兒の大部分は、既に學童期において完成されてゐるものであるといふことになるのであります。

然もこれは、現に犯罪を犯してしまつた時の年齢でありますから、かやうな恐しい罪を犯さないやうに、家庭教育の立場から、豫め注意しなければならぬ年齢といふのは、これよりも一年か二年早くなければならぬ筈であります。從つて學童の不良化を防止しやうといふ立場から、各家庭なり、學校なりが充分の注意を拂はなければならぬ年齢は、十歳頃

までの學童前期にあるといつてよいでありませう。まだ十にもならぬ子供だものといつて油斷してはなりません。多くの不良少年は、この頃に現れ出た惡い癖を直してもらへなかつたばかりに、とう〳〵悲しい運命に弄ばれるやうになつたのであります。

第十二講　學習の指導

一　上手な勉强法

百聞一見に如かず　學童期に入つた子供は、敎へなくとも、自ら學ばうとする態度を自然に現すものでありますが、その學び方を適當に指導するのと、しないのとで、その効果に、著しい違ひを示すに至るものであります。

一通り心得ておく必要があります。

昔から「百聞一見に如かず」といつて、實際の品物なり、場所なりについて、直接に學ぶ知識は、最も確實なものであるといふことを訓へて居ます。今日の敎育でも、直觀——即ち、出來るだけいろ〳〵の感覺を使つて、實物を直接に觀察させる——の方法が最も有効であるといつて、この學習法を重んじて居るのでありますから、唯單に本の上で讀む

だけとか、話で聞くだけとかいふ學び方に偏しないやうに、出來るだけ實地について、生きた知識を習得させるといふ方針で、子供の勉強を指導するのが最も望ましい心がけであります。

好きこそ物の上手なれ　好きなものには誰でも心を引きつけられます。從つてそれに深く注意しますから、そのものをよく覺えることが出來るといふ譯であります。昔から「好きこそ物の上手なれ」といつてゐるのがそれであつて、子供の勉強を効果のあるやうに行はせようと思へば、やはりこの理窟をうまく利用しなければなりません。

小學校の一・二年といふ低學年では多くの場合、親なり、教師なりからかやうな面白みとか、興味といふものを起してもらふやうに仕向けられなければ、好きにならないのが普通でありまして、勉強すべきことがらを、好きにさせる爲には、それ相應の苦心をしなければなりません。例へばこの時期の子供に非常に喜ばれるところの童話を話して聞かせながら、子供等に話を聞くといふ態度を起させておいて、その興味に乘じて、修身のお話をして聞かせるなども一つの方法でありませう。

ところが三・四年頃になると、意志の發達と相俟つて、子供等は、六ケしいことを自分の努力でやりのけるところに、一種の興味を感ずるといふことが、しば〳〵現れるやうになります。かうなると、親なり、教師なりが、特に子供に興味を起させるやうに仕組んでやらなくとも、子供等自身で、興味を見出して勉強して行くやうになります。かやうな傾向が、學年の進ひに從つてます〳〵多くなるものでありますから、努力の後に來る新しい興味を豫想させるやうに導くことも亦、大事な學習指導法の一つであります。

骨折損のくたびれ儲け　好きなことはいくらやつても飽きないといふことは、よくあることでありますけれども、飽きないからといつて必ずしもその勉強の効果に變りがないとは限りません。それは、好き嫌ひとは別問題に、勉強しさへすれば、必ずそれだけの疲れが心に殘るからであります。疲れが出て來ますと、長い時間をかけて骨折つても、それだけの効果があがらないものでありまして、かへつて疲れをどん〳〵增すだけで、それこそ

骨折損のくたぶれ儲けといふ結果になり終ることがあるのでありますから、その點をよく考へて子供の勉強を指導しなければなりません。この簡單な理窟を辨へない爲に、子供が長い時間机の前に坐つて居れば、それで澤山勉強が出來るものだと思込んでゐる親を、しば〳〵見受けるのでありますが、これなんぞは全く下手な勉強法の一つであります。

勉強の効果を出來るだけ多くしようと思へば、先づその學ぶべき材料の要點をつかむといふ勉強法を指導しなければなりません。材料によつては、初から終りまで、一字殘らず皆覺えてしまはなければならぬといふものもありますけれども、多くの材料といふものはその要點を覺えさへすればそれで充分だといふ場合が多いものであります。さういふ時に、一から十まで皆覺えようとすれば、それだけ多くの勢力を使はなければならぬのでありますから、どうしても無駄骨を折るところが出て參ります。

同じやうなことが、全體を覺えなければならぬ材料についても出て參ります。それは、その全體の材料の中でも、覺え易いところと、覺えにくいところとあるのが普通でありますから、その時に、先づ覺えにくいところだけを取り出して、そこを、他の部分よりも多く繰返すといふことにすれば、六ケしいところを覺えてしまふまで、何遍も〳〵全體を繰返すよりも、ずつと心の働きの經濟になるわけであります。

それから繰返すといふことについても、經濟的な繰返し方と、骨折損な反覆の仕方とがあるわけでありまして、例へば、同じ十回反覆するにしても、續けざまに十回反覆する場合と、五回反覆したならば、しばらく休んで、それから又五回反覆する場合とは、その勞力から見れば同じでありますけれども、その効果から見ればずゐぶん違ふものでありまして、後の方の、分けて反覆する方がずつと能率のあがる勉強法になるものであります。

かやうにして出來るだけ、無駄骨を折らないやうな能率的な勉強法を選ぶことが、子供の心理に適した最も望ましい指導方法であります。

二　勉強の奬勵法

褒賞　子供の勉強を奬勵するのに最も多く用ひられる方法は、褒めることゝ叱ることでありますが、その中の褒め方について考へて見ますと、幼い時代には、お菓子とか、繪本とか、衣類とか、學用品とかいふ實際の品物を御褒美に與へて奬勵するのが普通でありますけれども、これも度を過ごすと、御褒美をもらひたいから勉強するといふことになつて甚だ面白くない結果を來すことにもなるのであります。御褒美は餘り多きにすぎないやうに、そして次第々々に精神的な褒め方に移るやうにすることが望ましいものであります。

殊に劣等兒に對しては、褒めるといふ奬勵の仕方が、著しく効果のあがるものでありまして、常日頃仲間からも、教師からも、あれは出來ない子だと定評を與へられてゐたものが圖畫とか、唱歌とかで、ちよつとした出來榮えを示したやうな時、そこをつかまへて、褒めてやると、非常に元氣づいて、どん〳〵その特色を伸ばすやうになるものであるといふ實例を、私はしば〳〵聞かされて居ります。

叱責　學校の成績が思ふやうに出來ない爲に、これを向上させる目的で、親がしば〳〵その子供を叱つたり、責めたりすることがありますが、これも程度もので、餘り叱言が多すぎると、かへつて子供をいぢけさせたり、ひがませたりすることがありますから、餘程注意しなければなりません。私が嘗て取扱つた教育相談の實例の中にも、父親が、その子の勉強を奬勵したい餘り、その子の成績の惡くなることを恐れて、絶えず「こんな成績でどうするか」「餘り出來ないと學校を止めさせてしまふぞ」と叱つたり、おどしたりして、その子の勉強を責めてゐたが、かへつてその子の成績がます〳〵惡くなるので、その姉が心配して相談に來たといふ例があります。私はこの時その父親の奬勵法の見當違ひであることをよく話してやつたところ、それを傳へ聞いた父親が、今までの方法の惡かつたことを悟つて、その奬勵法を全く改めた爲に、その子供も非常に朗かな氣持となり、勉強も非常によく出來るやうになつたといふことを、しばらくしてから、その姉から知らせてよこしたことがありました。

この實例でも解るやうに餘り叱りすぎるといふことは、決して子供の勉强法とならないばかりでなく、かへつて邪魔になることが多いのでありますから、そこをよく辨へて、古歌にあるやうに

可愛くば五つ教へて三つ褒め
二つ叱つてよき人にせよ

といふ氣持で、叱ることは成るべく少なくして、時にこれを褒め、又時々よく訓へ諭すといふ方針で、子供の勉强を奬勵することが最も望ましいことであります。

第十三講　氣質と性格

一　氣質と性格の觀察法

四氣質　どんなに學問が出來ても、その人柄が充分練り鍛へられてゐなければ、ほんとうに立派な人間といふことが出來ないのでありますから、立派な子供を育て上げようと思へば、その勉强なり、學習なりの指導を充分に行ふと同時に、その性質の方面の指導といふことについて、一層深い注意を拂はなければなりません。

子供の性質の特色をきめるのに、最も大きな關係をもつものは、その子供の感情や意志の働きの土臺となるところの氣質といふものであります。これについては、今日の心理學の上でもいろ〳〵議論のあるところでありますが、今まで最も多く行はれて來た氣質の見方は、その感情の生れつきの働きかけた方から見た四つの區別でありまして、その第一は、

何かおかしいことでもあると、最先に笑ひ出すが、その笑ひたるや極めて上すべりで腹の底から笑ひ出すといふ強さをもたないところのあつさりした陽氣な氣質であつてかういふ氣質を多血質といつて居ります。

これと反對に、少し癪にさわることでもあると、すぐプリ〳〵と怒り出して怒鳴りつけるが、何時の間にかさつきの怒りを忘れて機嫌がよくなつてしまふといふ、いはゞ夕立のやうな、俗にいふ雷爺といつた樣な短氣な人間を膽汁質の氣質の人と名づけて居ります。

これと反對に、何か悲しいことでも起ると、そんなに急に悲しみ出すといふことはないけれども、來し方、行く末を考へ合せては、じり〳〵とその悲しみの感情を深めて行き、然も一旦悲しみ出したら、次から次へと悲しいことばかり思ひ出されて、何時までも〳〵その悲しみの感情がつきまとつて心を離れないといふ、いはゞ執念深いそして陰氣な氣質の人間がありますが、かういふ氣質を神經質又は憂鬱質と名づけて居ります。

もう一つは何かおかしいことでもあつた時、皆が笑ひ終つた時に、はじめてウフ、と微かに微笑む位であつて、喜怒哀樂の感情が、極めて淺く、然も現れにくいといふ、いはゞ落付いたどつしりした平氣な氣質であつて、これを粘液質と名づけて居ります。

右のやうな、多血質、膽汁質、神經質、粘液質の四つの氣質の中の、どの種類の特色を最も多く現すかといふことについては、永い間その子供の日常の行動についてよく觀察した上できめなければなりません。

內向性・外向性　氣質といふ言葉は、人間の感情の働きの生れつきの特色について名づけた言葉でありますから、その働き方をどういふ點から見るのかといふことによつて、それ〳〵その分け方なり、名づけ方なりが違つて來るわけであります。右に述べた四つの氣質は主として、感情の働き方の強さと、速さとの點から見た分け方であつて、感情の働き方が、速くて弱いものを多血質といひ、速くて強いものを膽汁質、遲くて強いものを神經質、遲くて弱いものを粘液質と名づけたものでありますが、今度はこれと違つた方面から、その感情が、自我とか、自分とか、內部とかの方面に向つて働きかけ易い生れつきの人と、

その反對に自分以外のものとか、外部とかに向つて働きかけ易い人との二つに分けることも出來るわけであります。

この內部へと外部へとの働き方によつて分けるところの考へ方は、最近心理學の方でも非常に重んぜられるやうになつた見方でありまして、前の方を內向型の氣質の人と名づけ、後の方を外向型の氣質と名づけて居ります。

もう少し詳しく述べるならば、內向型といふ方は、自分のことだけを深く考へて、他の人のことを餘り考へないとか、從つて獨りぼつちで居ることを好み、むつゝりやで、他人と交ることを餘り好まずそれよりも引込んで本でも讀んでゐた方がいゝといふ風に考へる人で、考へることが好きで、よくあれやこれやと考へすぎることが多い爲に、とかく決心がつきにくいとか、その代り、事を愼重に、かまへてやるとか、或は人から差圖をされることが嫌ひで、自分の思を通さうとし、氣むづかしやで、陰氣で、執念深く、その代り辛抱强く、物に凝る性分があるといつたやうな性質の人間であつて、外向型といふ方は、丁度これらの反對の性質の氣質であります。

性格　右のやうないろ〳〵の氣質が、その子供の感情の生れつきとして、親から遺し傳へられて來てゐるのでありますが、これが生れてから後のいろ〳〵の境遇や教育の力によつて、一定の特色をそなへたその子供の心の型なり、習慣なりといふものになつて參ります。押の强い人間だとか、なか〳〵食へない人間だとか、圓滿な人間だとかいふ、その人〳〵の根本の特色を示す一種の型といふものが出來て參ります。それをその人の性格と名づけるのであります。

性格といふ言葉は、最近の心理學においても非常にやかましくいはれるやうになつて參りましたが、まだはつきりと決つた解釋の仕方をもたないやうであります。從つて或る學者は、右に述べた內向型、外向型のやうなものも性格の一種であるといふやうにいつて居りますが、要するに、性格は、氣質といふ感情の生れつきが土臺となつて、いろ〳〵の經驗の結果作り上げられたその人の一定の生活の態度であると私は解釋して居ります。

最近では、性格の型とか種類などについて、いろ〳〵の議論の起るのは、結局學者が自分勝手な考へ方を基にして勝手に分けてゐるからで、これでは何時までたつても、性格とはこんなもので、こんな種類に分けられるものだといふ結論に達することが出來ないのだから、むしろ、もつと據り所のある、誰でもさうと認めずに居られないものを土臺にして分ける方がよいぢやないかといふ考から、性格の土臺をからだのいろ〳〵の特色に求めるといふ研究の仕方が現れて參りました。例へばからだの格恰即ち體型といふものからして疳型とか細長型とかに屬する體型の人間は、非社交的な、裏腹のある神經質な分裂性といふ性格に屬するとか、筋骨たくましい鬪士型の體型をもつてゐる人間も、やはり分裂性の性格に屬するとか、肥滿型の體型をもつた人間は、親切で、社交的で、あけつぱなしで氣のおけない、その代りお天氣者な循環性の性格に屬するとかいふやうな新しい研究を試みる學者の現れて來たことなどもその一例であります。

その他、からだの中のいろ〳〵の腺から分泌されるホルモンの特色によつて人の性格がきまるとか、更に最近に至つては、人間の血液にO・A・B・ABの四つの型があるといふ醫學上の發見を基にして、これと性格との間に密接な關係があるやうに思はれるといふ新しい學說が出て來るなど、からだと性格との關係の研究は、ます〳〵盛んになつて參りました。

最後の血液型と性格との關係の研究は、我が國獨特の研究で、これには今、古川學士の學說と私の學說との二つが丁度對立してゐる形でありますが、何れもまだ假說の時代でありますから、今後私共の研究の進むに從つてこの問題がいろ〳〵の新しい事實を物語るやうになることゝ思ひます。

私は右のやうな最新の研究を基礎にいたしまして、私獨特の性格の分類法を學界に發表して居りますけれども、餘り煩雜になりますから、今後の機會に讓つて、こゝでは省略することにいたします。

要するに、氣質や性格の問題は、目下、世界各國の心理學者が一生懸命になつて、各方

面から研究を續けてゐる最中でありますから、この問題に關する最後の解決は、こゝ數年乃至十數年を要することでありませう。私共も及ばずながら、その末席を汚しながら、私共獨特の研究方法で、この問題の解決の爲に精進しつゝあるものであります。

二　氣質と性格の教育

品性　氣質や性格は、その人の感情の生れつきとか、その働き方の習慣的となつた意志の傾きといふものであつて、いはゞその人の考へ方や、行ひ方の原動力となるところの力であります。いはゆる「善にも強い、惡にも強い」といふ時の、その「強い」といふのがその人の氣質とか性格とかいはれる方面であつて、善に向くのか、それとも惡に向くのかといふことは、その人の性格とは別な問題であります。

この原動力となる性格を、單に自然のあるがまゝの現れとして見ずに、それを善い目的の爲に働きかけるやうに導かうといふ立場から見て、これを教育の目的として考へる場合には、この性格を又品性と名づけることがあります。でありますから、性格に對しては強いとか弱いとかいふ自然の力を表す言葉を用ひますけれども、品性に對しては、善いとか惡いとかといふ道德的價値を云ひ表す言葉を用ひるやうになつて居ります。下等な品性とか下劣な品性などゝいふのも皆同じ見地から來るものであります。

若しその人の性格が、善い事を好み、惡い事を憎み、善い事を行ひ、惡い事を避けるといふことに働きかけるやうに習慣づけられてゐるならば、その人の品性は、高尚であり、又道德的であると言はれるのであります。

人格　かやうな道德的な品性のことを又人格と名づけて居りまして、人間を教育する目的は、最初にもお話しましたやうに、獨立の社會生活を營むことの出來る人格を養ふことにあるのでありますから、この氣質や性格といふ子供の全體の心の働きの原動力となる働きを、絶えず善なる目的の方向に働きかけさせ、惡なる目的の方向には働きかけさせないやうにするといふ指導の仕方は、實に家庭教育の根本問題であると同時に、人間教育の究

極の目的でもあるのであります。すべての習慣の形成に對して、最も大事な時期をなすところの學童期の兒童を預る家庭も、學校も、この氣質性格の教育に對して一段の注意を拂ひ、見るもの聞くものすべてを、善なる目的への誘導の泉たらしめるやうに、兒童の環境を純化することに努めなければなりません。

第十四講　興味と理想

一　興味の型

興味の意義　「好きこそ物の上手なれ」とか、善を好み惡を憎むといふやうに、子供の學習にしても、その品性にしても、その向上を計らうと思へば、常に子供の心がそれらの知識とか善とかいふものを好き好むやうに、その快の感情がその目的のものに向つて、强く働きかけられなければなりません。かやうな好き好みの快の感情が、その目的のものを選んで、それに注がれる狀態が即ち興味でありまして、子供が如何なる目的を選んでそれに興味を注ぐかといふことは、子供の全體的な、或は根本的な特色を知る上において非常に大切なことがらであります。

知識を求めるとか、善を好むとかいふ働き方は、それ〳〵子供の興味の向ふ一つの方向

であります。この他にまだ、繪や歌を好き好むとか、級長になつて皆に褒められることを好むとか、お金を澤山貯ふことを好むとかいふやうに、子供の目的とするものゝ種類が澤山あるわけであります。

それらのいろ〳〵の種類を幾つかの大まかな種類にまとめることが出來るわけでありまして、或はこれを三つに分けたり、六つに分けたり、それ〴〵の學者の立場によつて、その分け方にいろ〳〵の違ひが出て參りますが、私は今までのいろ〳〵の實驗的研究の結果から、興味の種類を次の七つに分類することを試みて居ります。

(1) 理論型

珍しいことを見たり聞いたりすることを非常に喜び、解らないことについて、徹底的に質問し、自分の考を確めるためにとか、或は研究心を滿足させるために、いろ〳〵の實驗を試みるなど、知識慾の旺んな、そして筋の通らないことや、矛盾したことの嫌ひな、考へ深い、理窟を尊ぶところの態度。

(2) 經濟型

おいしい物を食べるとか、立派な着物を着るとか、お金を澤山ためるとか、その他何でも自分の物慾を滿足させることに、強い執着をもつ、打算的な、そして所有慾の旺んな、利に敏いところの態度。

(3) 權力型

負けず嫌ひで、威張りたがり、お山の大將氣取りで仲間を支配し統御することを好み、自分の威力を認められ、或は褒められることを非常に喜び、優越感にひたり、支配慾を滿足させることに強い執着を有する態度。

(4) 審美型

音樂を聞いたり、繪を見たり、小說を讀んだりすることを好み、又自分で歌つたり、彈いたり、描いたり、創作したりすることにも、強い興味を感ずるといふやうに、美に憧れ、表現慾に富みかつ感受性の強い態度。

(5) 社會型

年少者をいたはり、友達の難儀を救ひ、己を棄てゝ他人のために盡すといつたやうな、親切で同情深く、犧牲的精神に富んだ態度。

(6) 宗教型

神様や佛様のお話を聞くことを喜び、神佛を尊び、お祈り禮拜などの敬虔な態度を自ら外に現さうとする態度。

(7) 活動型

ぢつとしてゐるよりは、身體を動かし、運動競技などの身體的活動に勢力を費すことを最も喜ぶ態度。

以上のやうな態度を顯く示すやうな、心の特色を有するものを、それ〳〵右のやうな興味型の子供と見るものでありまして、かやうな興味型の何れに最も多く屬するかといふことを、實驗的にきめるための我が國最初の標準檢査法として完成したものが、第二十講に詳しく述べて居りますことの、私の興味型テストであります。

興味の發達　この興味型テストを、幼稚園時代の幼兒から、小學校時代の學童、中等學校時代の生徒に至る約六千名の兒童に適用した結果その發達の狀態に、頗る興味のある事實を發見することが出來たのであります。即ち、幼兒期から學童期へ入ると、右の七つの興味の中の宗教的、社會的、理論的興味の三型において、非常に高い點數を表し、これに反して、經濟的及び權力的興味の點數が最も低く、活動的及び審美的興味の點數がその中間の位置を占めるといふ結果がそれであります。然もこの對立は、年齢の進むに從つてますく〳〵はつきりして來るといふ事實も示されたのであります。

言ひ換へれば、子供が最も好むものとして、衷心から求めるところの目的は、初は物慾的なものであつたものが、次第々々に精神的な興味とか、價値とかを有するものに發達變化して行くものであるといふ、自然の發達順序を物語るものでありまして、これによつて一人々々の子供が、かゝる根本の要求において、果して普通一般の發達をとげてゐるかど

うかをも診斷することが出來るわけであります。

興味の永續　かやうな興味の特色が、果して永續するものかどうかといふことに對して今までかやうな精密な檢査法が餘り發表されなかつた關係上、はつきりした結論が示されて居りませんけれども、私の研究の結果では、少くとも一ケ年間は、大部分の子供が、前年に現した時と同じやうな特色を示すものであつて、殊に尋常四年以上の學童並に中等學校生徒において、その永續性が最も著しいものであるといふ事實が證明されました。二年以上隔つたらどうなるかといふ研究は、今後それだけの年數がたゝなければ、私の研究結果が出て參りませんから、何とも結論されないわけでありますが、然し四年以上の學童において、著しくその永續性を現し始めたといふことは、この頃からの子供の興味の特色をかやうな興味型テストによつて檢査するなり、或は注意深い觀察を試みて、早くこれを發見し、その特色に應じて、將來の學校選擇なり、職業指導なりを行ふときの資料としなければならないものであるといふことを物語るものであります。

二、理想的人間の種類

生活型式　かやうな興味の種類に現れたその子供の特色は、やがてその子供の理想とするところの、價値なり、目的なりに關係して來るものであります。一體人間が最も好むところのもの、或は最後の理想とするのものは何であるかといふことについて、ドイツの教育哲學者シュプランガーは、六つの種類をあげて居ります。即ち、眞理を求めようとしてコツ〳〵研究してゐるところの學者の憧れる「眞」といふ價値と、財產を目當にせつせと働いてゐるところの實業家が憧れる「用」とか「役立つ」といふ價値と、代議士なり、大臣なりを目當として頻りに奔走するところの政治家が憧れる「權力」といふ價値と、立派な作品を目當てとして苦辛慘憺してゐるところの藝術家が憧れる「美」といふ價値と、世の爲人の爲、といふことを目當てとして、己を犧牲にしながら滿足してゐるところの博愛慈善家が憧れる「愛」といふ價値と、救ひとか成佛とかを目當てとして神に祈るところ

の宗教家が憧れる「聖」といふ價値との六つがそれであります。それらの六つの理想、目的の何れを中心として生活するかによつて、その人その人の根本の特色が違つて來るものであるといふ立場から、こゝに六つの理想的人間の型をきめたのであります。即ち理論型・經濟型・權力型・審美型・社會型・宗教型の六つの生活型式といはれるのがそれであります。

わが子をどんな人間に仕上げようかと思ひ迷ふ親は、先づ、わが子の特色、殊にその理想を求める生活態度が、この六つの人間の型又は類型の何れに最も近いものであるかを精細に觀察し、慎重に考慮して、然る後決しなければならないのであります。

興味型と生活型式　かやうな生活型式は、充分發達した成人において始めて確立されるのでありますが、その芽生えとも見るべきものが、既に幼年の頃から現れてゐるのではないかといふ見地から、私は今その大事な研究にとりかゝつてゐるのでありますが、今までの研究の結果から見ますと、そろ〳〵生活型式の完成しかゝつてゐるところの青年期の生徒について、興味型テストと、生活型式の評價とを、別々に行つた結果を、後で照し合せて見た結果、その間に密接な關係のあることを發見いたしました。かうしてみると、學童期ではまだはつきり外部に現れて來ない生活型式の芽生えを、私の興味型テストでもつて、發見することが出來るやうであります。

第十五講　智能の新しい見方

一　優秀兒・劣等兒の新しい見方

偏知主義教育の餘弊　人間のほんとうの値打は、その人の品性の高下、理想・目的の如何によつて決めらるべき筈でありますけれども、かういふ心の奥底の方面に關する研究なり、〳〵觀察なりが非常に面倒なところから、學校の入學考査なり、銀行、會社の人物考査なりといふものには、とか〳〵その人間の學識、學歴といふ方面を偏重するといふ傾が見受けられます。これは過去の教育界なり、人間社會なりを支配してゐたところの、知識偏重の風潮とか、物識り教育の偏見とがによつて誤されてゐるところも、非常に大きいものでありまして、今かやうな不具な教育なり思潮なりといふものが、次第に消え失せて、もつと〳〵全體の生命を働かせるところの教育を施さなければならぬといふ風潮が、一世を風靡

するやうになりました。

然るに、人間の心の生れつきを檢査しようとするところの精神檢査法の發見は、まだこの新しい時代の要求に應ずることが出來ずに、偏知主義時代の、殊に物識り教育時代の餘弊をそのまゝ受け嗣いでゐるやうな感があります。それは、人間の賢さの生れつき即ち智能を檢査する場合に、今から三十年も昔に考へられた、ビネー・テストの舊式に從つて、言葉を主とした智能檢査法を重視し、このテストで立派な成績を示した子供を優秀兒と名づけ、劣等な成績を示したものを劣等兒と名づけるといふ方式を遵奉してゐるといふことであります。

勿論、言語を用ひる智能檢査法は、子供の智能を診斷する上において、必要缺くべからざる最も重要な方法の一つでありますが、然しこれのみが唯一の形式であるとは限らず、他にもつとこれと併せ用ひなければならぬ重要な方法があるのではないかといふ疑問がしば〳〵起るのであります。

その結果には、今までのテストで劣等な成績を示した子供が、同様に學校の成績では惡い結果を示すけれども、さて卒業した後になつて、意外な成功をするといふ實例が續々として出て來るやうになつたのであります。これは、今までのテストの結果は、今までの學校成績を豫想することは充分出來たけれども、今までの學校成績で見落してゐたところの大事な子供の生れつきを今までのテストも亦見落してゐたといふことを物語るものであります。つまり、今までの教育は物識り教育でありましたが、極端にいへば頭の中に澤山詰込んでゐさへすれば、それで優等生なので、算術とか、讀方とか、地理、歴史とかいつたやうな、主として言葉を仲介として習得されるやうな、いはゆる知識學科といふものを覺えさへすれば充分であつたので、圖畫とか、手工とか、裁縫とかいふ、いはゆる技能學科などといふものは、でんで問題にならなかつたのであります。

智能三方向說　かやうな偏知主義、物識り主義の教育に慣されて、永い間見過されて來た、いはゆる劣等兒の中に惠まれてゐる新しい賢さを何如にして發見すべきかといふことが、これからの家庭教育並に學校教育の大きな問題であります。そのことは次の、劣等兒と折紙つけられた子供が非常な成功をしたといふ實例の說明において、一層明かにされるのでありますが、とにかく賢さの生れつきといふものを、唯一方面だけに見るといふことは片手落の見方であるといふことだけは、私のこれまでの、いろ〳〵の實驗的研究の結果からも、明かに結論されるところであります。

然らば、どういふ見方が一番合理的であるかと申しますと、私の今までの實驗的研究の結果と、教育相談の經驗と、世間的成功の實例とから推して、いはゆる智能三方向說が最も合理的でかつ最も實際的効果的な見方であると信ずるものであります。この新しい學說は、我が國では私以外に極く少數の學者が主張しかけてゐるにすぎないものでありますから、多くの人々にとつては耳新しいことゝ思はれますので、その要點をお話することにいたします。この學說は、その源をアメリカの心理學者に發してゐるものでありますが、それを土臺としていろ〳〵研究した結果、私の考へを可成り多分に含ませて私自身の學說と

して作りかへたものであります。

智能といふものは、學習する働きの土臺となる生れつきでありますが、學習するといふことは、この世の中にあるものを心の中に採入れるとか、そのものと吾々の心との關係をつけるといふことに他ならないのでありますから、この世の中にあるものをどういふ種類に分けるかによつて、その學習の種類がきまり、從つて又その學習の土臺をなすところの智能の種類もきまる譯であります。然るにこの世の中にあるものは、物か、心か、その二つの合したものかの三つのうち何れかのもの、又はそれの變化としてあるだけであります。物としてあるものは、勿論、空氣とか水とか草とかいふ自然物であり、それの變化としてあるものは、風とか雨とかいふ自然現象なり或は成長といふ現象であり、心は吾々の內部の變化たる精神現象であり、物と心との合體は、われ〳〵の身體と精神であつて之は離すことの出來ない一體の生命であり人間であります。從つて學習の對象となるものは、自然物又は自然現象か、精神現象そのものか、人間そのものかの三つの種類に分けられる筈であります。

然るにこの自然物を取扱ふところの學習はその物を扱ふといふ點において、それを見るとか、聞くとか、いぢくるとかいふ感覺や運動の働きを常に必要とする爲に、實體を具へた物とか、具體的なものとかの學習になり、殊にそれを取扱ふといふことになると、手際とか技術とかを必要とするところの學習になります。そこでこの種の學習を具體的な學習とか、技術的學習といひ、從つてかやうな學習の土臺となる智能を、具體的智能又は技術的智能と名づけるのであります。

次に精神現象を學ぶといふ働きは、右のやうな感覺とか運動とかいふ、具體的なものゝ働きを必要とせず、頭の中だけで、形も何もないことを考へて居ればよいのであつて、例へば哲學者が深く考へ込みながら、いろ〳〵の眞理を考へ出して行くなどゝいふのがそれであります。かやうに形のない、頭の中だけの學習をするといふ意味からこれを抽象的學智と名づけ、その土臺となる智能を抽象的智能と名づけるのであります。

第三の人を學ぶといふことは、人の表情、動作等からして、その裏面の心を讀み取つたりする學習であつて、これは、人と人との社會的關係をうまく治めて行く爲に必要な學習でありますから、社會的學習と名づけ、その土臺になる智能を社會的智能といふのであります。

その他いろ〳〵の六ケしい說明もありますが、以上が私の考を基にして建て直した智能三方向說の大要であります。かやうな學說の說明はどうであらうと、吾々が實際の家庭教育又は學校教育の上で必要なものは、その新しい學說の實用性といふことであります。

右の學說に基いて私は、三種の智能テストを使用しなければ、ほんとうに子供の智能を知ることは出來ないと主張して居ります。そのうちの抽象的智能は、今までのビネー・テストその他の殆んど大部分のテストによつて檢査されますが、技術的智能檢査法は、我が國においては、私の立方體構圖テストといふ標準テストが一種類あるだけで、他に學問的な手續を經て確立された標準のテストが出來て居りません。社會的智能テストは私が目下製作中で、他にまだ一つも現れて居りません。アメリカでは既に出來て、實用に供せられて居ります。

かやうな實際的檢査法が具備されるやうになつた以上、以上の學說は、既にその實用性の過半を實現し得たものと見てよろしいでありませう。次にその實際適用の効果如何といふ問題でありますが、この點については、私も多年の教育相談における學校選擇、及び職業指導において、非常な効果を收めて居りますから、今後この方法を更に改良して行つたならば、學校における教育指導でも、職業指導でも、非常な便益を受けるやうになるだらうと思はれます。

これらの新しい研究と實施との結果から、先づ第一に考へられることは、從來の優秀兒、劣等兒の見方に對して大改革を加へなければならないだらうといふことであります。即ち今までの優秀兒、劣等兒といふものは、その程度を判定する學科の方面から見れば、偏知

主義時代の名殘であるところの、知識學科といふ點だけでもつてこれを判定しようとし、智能檢査法の側から見れば、從來の抽象的智能テストだけで判定しようとするなど、何れにしても、兒童の一面しか見えないところの片手落な判定法で判定したものであるといひ得べく、從つて、「知識學科又は抽象的智能の方面から見れば」といふ條件で、優秀兒とか低能兒とかいつてゐるのであつて、決して全體的に優秀兒とか劣等兒とかと判定してゐるのではないといふことになるのであります。

從つて從來の判定で劣等兒だといはれた子供でも、今一つの技術的智能テストをやつてみると、その方の智能においては、かへつて優秀兒であるといふ實例に出會ふことがしば〳〵起るのであります。そして今まで劣等兒々々と呼ばれて來たものが、こゝに新しい自分の特色を見出してもらつて、その劣等兒が非常な發奮をしたといふ實例も經驗して居ります。

若し又第二の技術的智能も劣つてゐたからといつて、それでも未だ棄てたものではありません。それは第三の社會的智能において相當の發達を示してゐるならば、人を取扱ふ職業においては一人前の成功をなし得るからであります。

このやうにして三拍子揃つて皆劣等である時、始めてその子供はほんとうに劣等兒なのだと斷定してもよろしい。けれ共さういふ子供は又からだの方の勞働に從事させるといふ道もあるのですから、とにかく從來のやうな或る一種だけの智能檢査をして、それで子供の智能の優劣が決つたと早合點することは、非常に不親切な態度であつて、決してその子供を生かす所以ではありませんから、親も教師も、一應この新しい智能三方向說と、そして新しい優劣の見方といふことに對して、充分の關心と期待とをかけられることを切望して止まぬものであります。

二　劣等兒が成功した實例

低能兒といはれたエヂソン　以上の學說を裏書するやうな實例がいろ〳〵の方面からあ

げられるのでありますが、その最も著しい例の一つは、世界の發明王といはれたエヂソンの實例であります。エヂソンは人も知る如く、小學校入學後僅か三月餘りで退學させられた人であります。勿論それはその當時の學校教育の標準から見て殆んど低能兒に等しいやうな出來ない子供であつたからであります。エヂソンの幼なかつた時代には、物識り教育の最も盛んな時代であつて、我が國でいへば、論語とか源氏物語といつたやうな六ケしい大昔の言葉を澤山詰込んで、それを覺えて居ればそれで優等生といふ時代でありましたから、それこそ前に述べた頭の中でばかりで考へたり覺え込んだりすることに働きかける方の、抽象的智能だけが中心になつて、その他の實さなんといふものは殆んど問題にならなかつた時代であります。かやうな教育主義の時代の學校において受持の先生に、お前は低能兒だから學校を止めろといはれたエヂソンは、果してほんとうの低能兒であつたでせうか。エヂソンの母親が、この子は決して低能兒でないといふことを信ずるに至つたことの一つとして、エヂソンは、幼い時にいろ〳〵の實驗をすることを非常に好んだといふ特色を見出して居りますが、それなどは自然物とか自然現象とかを學んで行くのに役立つ、技術的智能の優れてゐたことを物語る一つの現れではなかつたかと私は思ひます。そして彼のその後の發明、發見といふことは、殆んど皆自然物を取扱ふところの、技術的な方面の發見であつて、哲學とか數學とかいふ抽象的な知識の開發といふことに對しては、殆んど何等の貢獻をなしてゐないばかりか、あれ程の偉大なる人物でありながら、哲學その他の精神科學を、無用の長物であるとひどくけなしてゐることゝ、あれだけの天才でありながら、數學に對しては至つて不得手で、少し六ケしい計算になると皆これを助手にやらせたといふ事實とを考へ合せて見ますと、どうもエヂソンは、抽象的智能においては、小學校で低能兒と折紙つけられる程あつて、餘り秀でゝはゐなかつたけれども、その代り學校教育では見出し得なかつたところの、技術的智能において非常な天分を惠まれてゐたものであると解釋することが、最も合理的なやうに私には思はれます。

劣等生が發明家　これはすぐ手近で私が直接聞いた實例でありますが、或る中學校の

五年の生徒で、學校の成績が餘り出來ない、いはゆる劣等生の部類に屬する子供でありましたが、丁度先般我が國でもやうやく個知主義の教育の非を悟り始めて、その弊害の一番多かつた中學校に對して、作業科といふものを設けることになりましたので、その劣等生は手工科を志望することになりました。ところがその劣等生は、手工室へ入ると非常な意氣込みで、コツ〳〵何かしら作り上げることに專念してゐるのであります。かやうな生活が一學期餘り續いた後に、彼はとう〳〵一つの器械を發明し、然もそれが立派に特許まで與へられるに至つたのであります。一度かやうな立派な發明をするやうになつて、今まで永い學校生活の間踏みつけられてゐたその天分が芽を吹き出すと、今度は次から次へと、新しい發明が行はれるやうになつて參りました。そこで中學校の先生方も劣等生つて馬鹿にならないものだといふ嘆聲を放たれたわけであります。

これらの實例から見ましても、今までの學校で劣等生だとか、低能兒だとかいつてゐる子供等に對して、もつと〳〵新しい眼を見開いて、見直さなければならないものであると

いふ私の主張の趣旨が、充分了解されたことゝ思ひます。

劣等兒が模範車掌　もう一つの實例は、知識學科も、技能學科も皆駄目で、それこそ正眞正銘の劣等兒だと思つてゐたものが、豈計らんや、卒業後數年ならずして、模範車掌になつたといふ例でありまして、やはりその生徒を實際取扱つた小學校の校長さんのお話であります。その子供は或る町の高等小學校を一番ビリで押出されて行つたが、家の都合でどこかに勤めなければならぬことになつたので、或る店の小僧に雇はれることになりましね。ところが根が劣等兒でありますから、釣錢の勘定はしば〳〵間違へる。仕事をさせても手が不器用といふので、とう〳〵その店を出されてしまひました。それから或る市の電車の車掌を志願しましたところ、學力劣等で見ん事落第。その後再募集が出たので、今度は或る方面から運動してもらつて、やつと合格することが出來たのであります。ところが採用されて見ると、お客の取扱ひから、仲間との折合、それに上役からのお覺えも極めて上々、非常に重寶がられてとん〳〵拍子で昇進、とう〳〵模範車掌に選ばれ、車掌數

皆にまであげられて、多くの部下を極めて上手に統御し、人望いやが上に高いといふ今日の成功を見るに至つたといふ話であります。そして今では同じ學級の一、二番といふところの友達が、苦心慘憺の受驗勉强をしてやつと師範學校に入り、五年間も學費をかけて卒業して來たのに比べて、そのビリで卒業の車掌さんの方が、遙かに多い收入を得るに至つたといふので、校長さんも人の成功といふものは、なか〳〵小學校時代の成績では判らないものだといふ述懷をして居られたのであります。

頭も悪く、手も不器用、それでわれ〳〵はその子供をほんとうの劣等兒と斷定してよいでありませうか。私は決してさうとは思ひません。第三の社會的智能がまだ殘されてゐるかも知れないからであります。ビリの卒業から模範車掌に昇進したこの劣等兒には、人を統御し、仲間を融合させるといふやうな、社會的交渉の取扱ひにおいて、特別の才能、手腕を發揮するところの天分を惠まれてゐたのではないかと思はれます。

三　劣等兒の導き方

得手を探せ　右の實例から見ましても、劣等兒の指導については、親も、教師も、ずゐぶん氣をつけねばならぬ問題が澤山あることゝ思はれますが、その中でも特に、何でもいゝからその子の得手を探し出して、それを伸ばしてやるといふ態度を、絶えず忘れないやうにすることが、最も大切なやうに思はれます。

さやうな得手は、私共のやつて居りますやうな特別の檢査法で發見することもありませうし、又ちよつとした機會から、それを發見することもありませう。何れにしても、子供の特色を見出して、それに應じた導き方をするといふことは、教育の根本態度であります。

けれども、今までの教育が、餘りに劣等兒を一面的にばかり見てそれで他を皆おつかぶせてしまふといふ嫌ひが多かつたことに對して、特にこの一事を注意して頂きたいものであります。

自尊心　お前は馬鹿だ、低能兒だといはれると、子供等は、それでもつて全部の心の働きを萎縮させてしまつて、折角働いて來るべき筈の働きまで現れなくなつてしまひます。卿ち自分はもう駄目なものだといふ劣等感に襲はれてしまふのであります。

この際、唯一つでもいゝから、お前はこつちの方が相當出來るから、これをやれといつて相當の自尊心を持たせるといふことが、特に常日頃仲間の者に馬鹿にされてゐる劣等兒の萎んだ心を引き立てゝ行く上において最も大切な心がけであるといはなければなりません。

第十六講　將來の方針の決め方

一學校選擇

幼稚の夢と子供の將來　小學校の上級になりますと、そろ〳〵家庭でも、學校でも、その子の將來の方針について思ひ惱むやうになつて參ります。どんな學校を選んだらよいか、どんな職業に進ませたらよいかといつて、われ〳〵の心理學的診斷を求める爲に、教育相談所に押かけて來るのも、五年の終頃から六年の中頃にかけてが一番多いやうであります。

この問題は、その子の一生を支配することにもなる大事な問題でありますから、餘程愼重に行はねばなりません。たゞ漫然と、中學校へでも入れておいたなら、そのうちに何とかなるだらうといつたやうな、無責任な、でも入學をさせて、後で後悔したといふ實例を

私は澤山見せつけられて居ります。

この問題をきめるについて先づ考へなければならぬことは、時勢の動きといふことであります。親の時代には、大學を出さへすれば立派に成功が出來たから、子供も大學を卒業させるやうに先づ中學校からといふ選び方は、必ずしも成功するとは限りません。今日の世の中は決して、さやうな學歴だけで立つて行ける世の中ではなく、もつと〳〵實力といふものを重視する時代となつて來てゐるといふことに氣がつくならば、必ずしも大學を卒業させなくとも、もつと手取り早く實力をつけて、實際社會に送り出すといふ道も考へられるでありませう。

學校の種類と子供の能力　かやうに、一方においては、子供が卒業する頃の世の中の有樣にまで眼を通し、考へを絲つてみて、その子供の將來の方針をきめる時の一つの參考とするとゝもに、他方においては、その子供の長所短所を深く考へ、その子の希望と、家庭の資力とを考へ合せた上で、最後の方針を決めるといふ慎重な態度をとることが必要であります。

子供の能力については、既に述べましたやうに、特にその智能の三つの方向の特色に應じて主として知的學習を重んずる中學校に對しては、その土臺となる抽象的智能の發達の程度を考慮し、主として技能的學習を重んずるところの、工業學校、工藝學校に對しては、その土臺となる技術的智能の發達程度を考慮するといふことなどは極めて大切な見地の一つであります。

その他、商業、農業、美術、音樂等の學校を選擇するにしても、皆それ〳〵、檢査の結果又は、日頃の觀察の結果、子供の興味、希望等を參酌して決定すべきものであります。

總じて學校の選擇は、或る程度まで將來の職業の選擇と相通ずるところがあるものですから、次の職業選擇の項と併せ考へて慎重に行はなければなりません。

二　職業選擇

職業の種類と性能　世の中には何萬といふ職業の種類がありまして、それらの職業に成功する爲には、その職業を成しとげて行く爲に必要な、いろ〳〵の性質、能力といふものが必要であります。そこでどんな職業にはどんな性能が必要なのかといふことについて、最近職業心理學の方でいろ〳〵研究されて居りますが、何分にも數の多いことでありますから一々の職業について、皆その性能を實驗的にきめるといふことは、容易のことではありません。從つてこれこれの職業については、大體こんな性能が必要だらうといふことを、心理學者が考へて決めるといふ程にしか進んで居りません。

今日比較的明瞭にされて居ります方面は、智能の程度によつて、職業の種類を分けるといふ方法でありまして、學者、技師、政治家、藝術家といふやうな、非常に優秀な智能をもつた人でなければ充分成功出來ないやうな程度の職業を高等專門職業と名づけ、銀行會社員、電信技手、商人等の普通の智能の程度で成功出來るやうな職業を中等職業と名づけ多少劣つた智能をもつてゐても、少し練習すれば成功出來るといつたやうな程度の各種の職工のやうな職業を半熟練職業と名づけ、全く智能を要しない、いはゞ劣等者でも低能者でも出來るやうな程度の勞働職業を、非熟練職業と名づけて居りまして、これらの職業に適するか否かは、それ〳〵の智能テストで檢査すればすぐ判ることでありますから、この方面の判定は比較的簡單であります。

次に智能の程度だけでなしに、その種類から觀た職業の分け方をしようといふ新しい研究が、ドイツの職業心理學者の間から起つて來て居ります。それは觀念とか心とかを相手とするところの職業と、物を相手とする職業と、人を相手とするところの職業との三大別でありまして、丁度私が前に主張いたしました智能三方向說とぴつたり合ふところの考へ方なのであります。例へば高等專門職業の中でも、觀念を相手とする職業は、哲學者、數學者のやうな考へることを主とする職業であつて、物を相手とする職業は、技師とか、彫刻家とか、自然科學者とかであり、人を相手とするものは、裁判官、辯護士、教師などであるといふのであります。

この三つの分け方は、中等職業以下の職業にも當てはめることが出來るのでありますから、今後の研究や指導の爲に、非常に大切な考へ方であると信じます。

その他氣質とか、性格とかいふ方面からも分けられるのでありますが、その方面の研究はまだ充分行はれて居りませんから、こゝには省略することにいたします。

性能に關係して特に考へなければならぬ問題は、不適性といふことであります。例へば色を取扱ふ職業に對しては、色盲のある人は不適性者であり、音を取扱ふ職業に耳の遠い人は向かないといつたやうに、その職業に必要な性能において欠陷をもつてゐるものは、不適性をもつてゐるといはれるのであります。

適材適所　そこで職業の選擇にあたつては、自分の不適性と適性とを弁め心得ておいて然る後、その不適性の職を避け、適性の職業を選ぶといふ方針で進まなければなりません。これがいはゆる適材を適所におくといふ、職業選擇上の大事な法則なのであります。

何故かやうな方針をとらなければならないかと申しますと、自分の性能に適しない職業を選びますと、その職業が必要とするところの或る性能を、一生懸命努力して練習發達せしめなければならぬことになりますから、その爲に非常な勞力を費すばかりでなく、そんなに努力してもそれでも尙到底充分その職業に堪へて行くことが出來ないといふことを自ら發見するとか、或は適性をもつてゐる人が、餘り努力しないでもすら〳〵とやつてのけられるのに、自分だけがどんなに努力しても、何時でも他の人に劣るといふことが判つて來て、次第にやけくそになり、つひにはその職業にゐたゝまらなくなるといふことになるからであります。

一度就いた職業を離れてしまふといふことは、今日の世の中においては、いろ〳〵の點で非常に不利な立場におかれてしまふものであります。なか〳〵職にありつけなくなりますし、幸にして職にありついたとしても、前の職業で練習した性能が、今度の職業に對して何等の役に立たないばかりか、かへつて前のその習慣を壞して新しい習慣をつくるのに邪魔になることさへあるのでありますから、心の經濟といふ點から考へましても、非常に

根になります。でありますから、職業を選ぶ時には極めて慎重に、そして一旦選んでその職に就いたならば、どこまでもそれをやり遂げるといふ態度を子供のうちに充分養つておかなければなりません。

第十七講　異常兒の心理と家庭教育

一　低能兒の心理と家庭教育

早期發見　すべて普通の子供と違つたところのある、いはゆる異常兒といふものは、早くから何處かにその缺點を現すものでありますから、出來るだけ早くそれを發見して、出來るだけ早くその指導方法を講ずるといふ方針で進むならば、低能兒でも、不良兒でも、聾兒でも、相當のところまでこれを伸ばすことが出來るものであるといふ確信を、私は多くの實驗的研究と、實際的指導との經驗から力强く主張することが出來ます。

特別指導　異常兒といふものは、多くの場合、その心やからだの發達の程度が、一般の子供よりも遲れて居り、その伸び方も亦從つて遲いといふことを特色とするもので、いはゞ程度の違ひに過ぎず、全く違つた種類のものであるといふことではないのであります。

ら、その遅れてゐるところを、特別の骨折でそれを徐々に導いて行くといふことが、何よりの指導法であります。普通の子供が一度で覚えることでも、智能の異常な低能児ですと三度も五度も繰返して教へなければ覚えないといふのが常り前でありますから、とにかく、親切に、根氣よく、丁寧に特別な指導をするといふことが、何よりも大切な態度であります。

低能児は、劣等児の更に程度の甚だしいものでありますから、その指導方法については、前の劣等児のところで述べたと同じやうなことが、こゝでも適用されるのであります。即ち少しでも殘されてゐるところの特色を發見して、そこに自尊心をもたせながら特別の指導をするといふのがそれであります。

治療教育　低能児には、往々にしていろ〳〵の疾病をもつてゐる爲に、智能の缺陷を一層甚だしくするものがありますから、この點について特別な注意を拂ひ、先づその疾病を發見し、それを治療し、然る後充分な教育を加へるといふ方針で導かなければなりません。例へば先天黴毒だとか、著しい胃腸の障害だとか、全身の發育不良だとかいふものもその一種であり、その他に病氣といふわけでもありませんが、鼻と喉との間に出來るアデノイドといふ特別な腺のために、智能の働きを鈍らせるといふこともあるのでありますから、かやうな身體上の異常を出來るだけ早く發見してこれを治療するといふことが極めて大切なことであります。

要するに低能児は、充分な治療と、熱心な、そして根氣强い教育愛とを注いで、特別の指導をするならば、相當のところまで導くことが出來るものであります。その實際の指導法などについても、今後機會をみてもつと〳〵詳しくお話したいと思ひます。

二　不良児の心理と家庭教育

不良児の大部分は劣等児　不良少年少女の大部分は、その賢さの生れつきにおいて非常に劣つてゐるものであるといふことを前にも述べましたが、實際私が多數の不良児につい

て、私の智能檢査法を適用してみた結果に鑑みましても、その八十パーセントまでは劣等兒乃至低能兒であります。

智能が劣つてゐる爲に、その行動は多く理性によつて統御されないところの、衝動的な動作となり、食べたいと思へば、前後の考もなしに、すぐ手を出し、欲しいと思へば、他人のものでも何んでも手をつけるといふことになるのであります。若しこの時、他人のものへ手をつけてはいけないものだといふやうな、躾へ方をその都度與へてくれるやうな家庭なり、環境なりがあるならば、練習の効で、次第々々にさういふ悪い行ひがなくなるのでありますが、不良少年を生む多くの家庭といふものは、この點において非常に欠けてゐる爲に彼等は、善いとか、悪いとかいふことを考へる暇なしに、何時の間にやら、さういふ悪い習慣をつけてしまふものであります。

從つて、不良兒の出來る一つの順序を簡單にまとめるならば、智能が劣る爲に、その行動が衝動的となり、然もその行動を導く適當な環境が與へられてゐない爲に、知らず〳〵の間に良くない行ひをして、それがつひに習慣となるものであるといつてよろしいであります。

意志薄弱　智能が劣ると、多くの場合、いろ〳〵のことを考へ合せるだけの働きが出て來ない爲に、右のやうに衝動的な行ひをするやうになるのでありますが、中には、智能は相當發達してゐても、それを打消すやうな、もつと〳〵強い我がまゝな感情が幼い時から働きかけ易いやうに習慣づけられてゐる爲に、やはり衝動的な行ひをするといふ不良兒も出て參ります。これなどは小さい時から、遊びたいのを止めても親の言ひつけを守るとか、自分のことは自分でするとかいふ意志の働きの習慣をつけてゐなかつた爲に、いはゆる意志薄弱に陷つて、自分の意志で、自分のひら來とか、慾望とか、衝動とかを抑へつけることが出來なくなつたところの子供でありまして、餘りに甘やかして、我がまゝの仕放題に育てゝ來た上流の家庭などに、よく現れるものであります。

かやうな意志の弱い子供は、どうしても、しつかりした自分の主義なり、方針なりとい

ふものを定めることも出來ず又それを定めたところで實行することも六ケしいのであります。

すから、勢ひ誘惑にかゝり易く、何時の間にか不良少年の仲間に引き入れられてしまふといふことが、しば〳〵起るのであります。

悪い環境　たとへ智能が低く、かつ意志が薄弱であつたにしても、その環境が良く出來てゐさへすれば、子供はなか〳〵不良兒になるといふことはないものでありますけれども、多くの不良兒の育つて來た環境を調べてみますと、その家庭にしても、近隣の狀態にしても、甚だいかゞはしいものが多いのであります。

先づ家庭について見ますと、片親が欠けてゐるとか、兩親とも欠けてゐるとかいふ子供が相當多く、揃つてゐても共稼の爲に、殆んど家庭を空け通しであるとか、かりに居つたところが、家庭の教育といふことに對しては全く無關心で、子供を野放し同樣に放任し、悪い遊びを覺えようが、悪い友達に引つかゝらうが、そんなことてんでおかまひなしといふ無責任な親であるといふ場合が、ずゐぶん多いやうであります。

かやうな投げやりの態度といふところまでは行かないまでも、子供の指導といふことに對して案外無智で、唯無暗に叱つてばかりゐるといふ親もよく見受けるのでありますが、前にも述べましたやうに、良い人間を育て上げようと思へば、五つ訓へて三つ褒め、二つ叱つて良い人にするといふ氣持で、若し子供が過つて惡いことをしたやうな時などでも、よく訓へ諭して導くといふ態度を持つべきであります。ところが、やゝもすると親の方がカッとなつて怒り出し、たゞ罵もなく怒鳴りつけるといふことがよくあるのであります。

かつて私が取扱ひました十二歳の不良少女に、かういふ實例があります。例によつて少さい時からつけられた買食ひの習慣がだん〳〵昂じて、とう〳〵近所の店先でかつ拂ひをやる、他所の家へ忍び込んでお金を盜み出すといふわけで、幾度か警察へもあげられるといふ名代の不良少女。とう〳〵親もゝて餘して、何とかしてこの子を感化院に入れてもらつてせめて近所への顏向けの立つようにしたいといふ念願から、方面委員に賴んで、いよ〳〵感化院に入れてもらふ手續を運び、先づその第一の關所たる精神鑑別所を訪ねて來た

わけであります。そこで早速いろ〳〵の精神檢査を施して見ましたところ、智能その他の精神の發達は相當遲んで居りまして、鑑別所へ來る子供としては、むしろ珍らしい位出來た子供でありますが、たゞその氣質の方面で、非常に勝氣な、向ふ見ずのところがあるといふことが判明いたしましたので、私も事によつたらこの少女は、感化院に入れるまでもなく、その家庭で充分矯正することが出來るのではないかといふ豫想がつきました。そこで先づ第一にその母親に、この少女の右のやうな氣質をうまく指導して行ける資格があるかどうかを調べてみることにいたしました。ところが、さすがに名代の不良少女を育て上げた母親だけあつて、その氣質は、その娘そのまんまの生寫し。その子が外で何か惡いことをして來たといふことでも判ると、娘の顏を見るなり、ガミ〳〵云つて怒鳴りつけるといふ有樣。さうするとその娘も負けない氣になつてその母に食つてかゝり、それこそ火に火を加へるやうな激情の爭鬪が行はれるのであります。それをその母は、「この子は我が子であるながら、まるで仇のやうだ」と批評し、「だから親のいふことをちつともきかない」

と結論してゐるのであります。

この母がその子を叱りさへすれば直せるのだと思つて來たことが第一の失敗であり、叱られてゐる時の娘の氣持がどんなものであるか、果して母親の怒鳴りつけながら云つて聞かせることを、教訓として聞きとるだけの、心のゆとりを持つてゐるかどうかを知ることが出來なかつたといふことが第二の失敗であります。

そこで私は、その母と娘とを別々に呼んで、よくその道理を說いて聞かせた上で、母親には先づ叱る前に、自分の力が足りないばかりにかういふ子供が出來たのだ、何とかして自分の力で直してやりたいといふ、懺悔と新りの氣持でその怒りを殺し、自分の氣持の鎭まつた時、靜々としてその子に說いて聞かせることがほんとうの教育であるといふことを授け、その娘には、今日の檢査の結果、必ず立派な人になるだけの生れつきを持つてゐることが判つたのだから、これから一生懸命努力して、一日も早く心の病を直し、皆に褒められるやうな立派な人になりませう、きつとそれが出來ますといふ强い暗示を與へて、母

と子の強い決心を促しました。

幸に母も子も私の誠意に動かされてか、涙を流して「きっと善くします」「きっと善くなります」と誓つてくれましたので、今日は何でもかんでも感化院に入れてもらはなければ二度と我が家に帰れないといつて、意氣込んで來た母親ではありましたけれども、私にも、きつとこの子は母の力で直せるといふ霊感がつきました爲、方面委員にもよく話をして、今日はこの能別所を通しませんが、その代り、今度一度でも惡いことをしたら、無條件でこゝを通しますから、今日は引歸して下さいと告げました。その後その娘は、自分の努力と母の力とによつてとう〳〵一度も惡いことをせずに伸びることが出來たのであります。

この實例から見ましても、唯いたづらに叱り飛ばすといふことは、決して子供を善に導く所以ではないといふことが判るであります。我が子を責める前に、先づ我が身を責めなければなりません。そしてたゞ眞心をもつて、子供に臨むだけであります。子供が如何に人の誠意に動かされるものであるかといふことゝ、理解のない家庭といふものが、如何にその子を邪道に導くものであるかといふことを物語る實例として、次にもう一つの取扱例をお話いたしませう。

それは或る女學校の二年生で、小さい時から我がまゝの仕放題に育て上げられて來た活動狂の不良少女の例であります。この少女は早く父親を亡くして、母親の手で育つて來たのでありますが、その母は教育といふことに對して何等の理解もなく、子供の云ふがまゝにドシ〳〵小遣を與へては活動にもやり、買食ひもさせて居つたのでありますが、そのうちに金の使ひ方が非常に荒くなり、母親から貰ふ小遣錢だけでは、とても間に合はなくなつて來ましたため、何時の間にか親の財布から、こつそり引出すことを覺え、つひに活動の帰りが遅くなると、一人で近所の宿屋に泊つて來るといふ大變なあばずれ娘になつてしまつたのであります。かうなりますと宿賃まで稼がなければならないので、親の財布位では到底間に合ひません。遂ひ近所の店先の錢箱に手がつく、留守の家へ忍び込んでは箪笥を探すといふことになつて、いよ〳〵本物の不良少女に鍛へ上げられたのであります。か

うなると勿論、世間では默つて居りません。たちまち警察の手が廻る。幾度か警察に引かれる。その内に捕へに來る家族の顏を知つてしまつて、私服で追ひかけて來ても、逸早くそれと知つて逃げてしまふといふ手に負へないところまで來てしまつたのであります。そんな樣子でありますから、警察では訴へのある毎に苦心して探しては、引つ張つて來て說諭をするのですけれども、馬の耳に念佛といふところであります。そこで警察でもて餘して、親に納得させた上で感化院に入れて直してもらふといふ段取りになつたのでありますが、一番困つたのは、どうして感化院まで連れて行くかといふ問題であります。勿論その娘は、そんな所に絕對に行かないと頑張つて、相變らず荒し廻つて居ります。

そこで警察と親戚の者とが協力してその娘を探出し、いよ〳〵感化院へ送り込まうといふことになつたのでありますが、先づ第一にその關門であるところの鑑別所で檢査を受けなければなりませんので、そこまで引張つて來るのがなか〳〵の難問題であります。私服巡査一人と親戚が二人、途中逃げられないやうにと三人で護衛しながら、やつとのことで鑑別所までやつて參りました。玄關先で、入れ、入らぬで護衛者とその娘との間に、永い間の競合ひがあつて、結局控室まで入りましたが、なか〳〵檢査を受けようとしません。そこで私は巡査と親戚の人々とにしばらく退場してもらつて、その不良少女と二人きりになつて、私の眞心こめた話を進めて參りました。さうしたら、今まで絕對沈默を守つてゐたその少女が、私の誠意に感じてか、突然檢査を受けるといふことを云ひ出したのであります。それから、いろ〳〵の心理的檢査を私一人でずつとやり續けましたが、終まで神妙に受けました。その結果は、さすがに女學校二年まで行つてゐる少女だけあつて、各方面とも、皆相當に發達してゐるのであります。そこで私はこれならば、感化院に入れても充分感化の見込みがあるといふ診斷を下して、いよ〳〵感化院に送ることに決定いたしました。ところが、それからが又一苦勞で、鑑別所から感化院までは、人家のない山道を二十分餘りも引込まなければならぬのでありますから、若し途中で逃げられたら困るといふ護衛者の心配が出て來たのであります。そこで私は、感化院といふ所は、普通の學校と同じ所

で、刑務所みたいな高屏も廻してゐなければ、垣根さへもおいてない最も開放的な所なんだから、途中で逃げる位の者なら、入院してからだつて何時でも出られるので、そんな者は入れたつてしやうがないのだから、問題はその子が入る氣持になるかどうかといふことであるといふことをよく護術者に話してきかせて、それから私がその不良少女と二人きりでしばらくしんみりと話しました。彼女はつひに泣き出しました。私の眼にも何故かしら露が宿つてゐました。彼女はその瞬間からすつかり別人になつたのであります。私はこの純な氣持に立歸つてくれた少女を、警戒的な眼で送り屆けようとする巡査に手渡しするには忍びなかつたので、私自身出かけて行くことにいたしました。所長自ら送り屆けるなんといふことは、それ以前にも、それ以後にもないことであります。それ程私は、この少女の發心に感激させられたのであります。巡査も親戚の人も非常に心配しましたけれども、私は責任を持つからといふことにして、その巡査を歸し、親戚二人に附添つてもらつて、山道を感化院へ送り届ける道すがら、私は彼女にいろ〳〵話して聞かせました。彼女は心から感謝しながら、感化院に行くことを喜んでくれました。ほんとうに修道院に入る尼さんのやうないぢらしさでした。親戚の人々も、非常に安心するとともに餘りに急激な變り方に吃驚して居りました。

翌くる日、私が研究資料の調査の爲に、感化院に出かける機會がありましたので、歸途女生舍を訪ねて見ました。そしてそこに、皆と同じ制服を着て甲斐々々しく働いてゐる彼女の姿を見出した時、私は彼女の爲に祝福せずに居られませんでした。

けれども、理解のない家庭はやつぱり駄目でした。それから二三日の間、私は研究の方が忙しい爲に、すつかり彼女のことを忘れて居りましたが、その後實驗の爲に感化院を訪ねた時にはもはや彼女の姿は、そこに見えませんでした。聞けば、彼女の母親が、定めし不自由な生活をしてゐることだらうと、不憫に思ふところから、盲目的な母性愛にひかされて、彼女を引取りに來たのださうであります。かうして折角發心しかけた純な乙女心を、理解のない愚かな母親は、再び放縱の生活に誘つて行つたのであります。

やつぱり不良少女を生ひやうな家庭には、それを救ふ道に對する理解さへも、持合せないものゝやうに思はれます。

三　聾啞兒の心理と家庭教育

殘聽　耳が聞えない爲に言葉を使へないところの不幸な子供を聾啞兒となづけるのでありますが、近頃では耳が聞えなくとも言葉を使へるやうに教育する方法が非常に發達した爲に、聾であるけれども啞でないところの子供即ち聾兒が澤山現れるやうになりました。

聾兒の心の特色に關する心理學的研究は極めて新しいものでありまして、我が國では、大正十四年の春始めて東京の聾啞學校に、聾兒心理學研究室が設けられて、私がそこの初代の研究主任としてこの方面の研究の開拓に手を下したのが、そも〳〵の始まりでありますから、まだ〳〵研究の日が淺く、これからといふところであります。私が今まで研究いたしました內容の各般にわたつてお話するといふことは、この小著では到底望まれないことでありますから、その中の主なるもの二三について、家庭教育といふ立場から、極く簡單にお話することにいたします。

先づ聾兒の特色といひますと、何といつても耳が聞えないといふことでありますから、その聞えないといふことが果して絕體的なものかどうかといふことについて一通り心得ておく必要があります。音を聽く力即ち聽力といふものは、普通の人でも、非常に鋭い人から、普通の者を通つて、非常に鈍い人即ち耳の遠い人に至るまで、いろ〳〵の程度の差があるものでありますが、聾兒の場合も同樣でありまして、普通の人の中で、最も耳の遠い人のその又次に遠い者に當るところが、丁度聾兒の中の一番聽力の鋭い者に當るといつたやうな關係になりまして、その上更に又聽力の鈍い聾兒があるといふやうにして、順にその聞えない程度といふものが甚だしくなつて參ります。

私がかつて、非常に精密な聽力計を用ひて、二百餘人の聾兒の聽力檢査を行つた時の結果によりますと、その器械でも尙且つ聞えないといふ聾兒は、全體の約三十三パーセント

しかなかつたのであります。從つて聾兒の大部分は、音を強く出しさへすれば、どこかの高さの音を聞けるものでありまして、この殘つてゐる聽力を殘聽と名づけるのであります。

私の實驗によりますと、その強さを同じとするならば、普通の話聲位の高さの音が、聾兒に對して最も聞き取り易い音であつて、それより高い音とか、低い音とかに進むに從つて、ます〳〵聞きとりにくゝなるやうであります。

從つて二百五十六振動乃至五百十二振動位の音を、強く發するやうな裝置を作つて、聾兒に始終音を聞かせるやうにするならば、やがてその音の程度の言葉を聞き取れるやうになるでありませう。

殊に私が永い間續けて、聾兒の殘聽の發達について研究した結果によりまして、始終音を聞かせて居りますと、初め聞えなかつた音でも、後にはだん〳〵聞えるやうになり、その結果、聾兒の殘聽を發達させることが出來るものであるといふことを證明することが出來ました。そしてその發達の仕方なり、程度なりといふものには、その人〳〵によつてそれ〳〵の特色があり、中には非常な勢で發達して行く子供もあります。或る聾兒の如きは初の一種類の音しか聞けなかつたのが、二ヶ月程練習してゐる間に五種類も聞けるやうになつたといふ實驗例がありますが、この聾兒は在學中に非常な發達をして、私の實驗を打切つてから五年程後には、普通の女學校に轉校させてもいゝかも知れないといはれる程までになつたのであります。

從つて、聾兒をもつ家庭では、聾だから駄目だと匙を投げずに、出來るだけ耳を使はせるやうにし、然もその聞かせる音は、成るべくその子供の地聲に近い程度の高さの音を選び、太鼓とか、自動車の警笛とかいつた强い音を出す道具を使つて、始終練習させることが最も望ましいことであります。

口話　聾兒はもはや聾啞兒ではなくして、どこまでも聾兒であつて、言葉を使へるやうになることを理想としなければなりません。然しこの口で話すといふ方法即ち口話といふことは、なか〳〵骨の折れることでありまして、言葉といふ形のないものを覺えるところ

の心の働き、即ち、抽象的な智能の働きを必要とするものでありますから、生れつきの甚だしく劣つてゐる聾兒は、到底口話で成功させることが覺束ないことゝ思ひます。從つてさういふ子供等は結局手話即ち手眞似法に歸つてしまふのも仕方がないことゝ思ひます。

普通の子供でも、甚だしい低能兒になると、どんなに苦心して教へても、言葉の發達が思うやうに行かないといふことがしば〳〵起るのでありますから、聾で然も低能兒である場合には、むしろ骨折損をするよりも、初めから容易な、具體的な手眞似法で導いた方が、効果があるかも知れません。そしてその口話に使ふだけのその子の勞力を、技術的作業の學習なり練習なりに向ける方がかへつて望ましいことかも知れません。

これに反して智能の優秀な聾兒は勿論、普通の者でも、抽象的な言葉を習得する能力のある聾兒に對しては、出來るだけ早く、口話を教へなければなりません。早ければ早い程効果があるわけであります。聾唖學校に出すやうな年齢になつてからでは、手眞似の方を先に覺えてしまつて、口話の教へ方に對してずゐぶん邪魔になることが多いのであります。

智能　聾兒に言葉を教へるにしても、その他の學科を教へるにしても、先づ考へなければならぬことは、その智能であります。盲人には塙保己一のやうな偉い學者も出て居りますので、昔から盲人は普通人と同じやうな賢さをもつて居るものと見られて來て居りますけれども、唖人には昔から秀でた人物が出てゐない爲に、むしろ低能なものと見做され、聾唖の教育に當る人々の間にさへ、從來しば〳〵聾唖者は低能であるとの公言を聞くやうな有樣でありました。

然るに最近になつて、私が聾唖兒の智能を檢査するところの標準の檢査法を作つて、これを聾兒に適用してみましたところ、決してさやうな低能者ばかりではなく、なか〳〵優秀な智能をもつてゐる子供もあることが發見されました。全體として見ては、普通の子供よりやゝ劣りますけれども、優れた者と劣つたものとが比較的少なく、普通に近いものは最も多いといふ傾向なども、普通兒聾兒兩場合ともに同じことであります。殊に前に述べました技術的智能においては、普通の子供との差極めて少なく、今後の聾兒の活動の天地

が、そこに約束されてゐるのであります。工夫と努力とを積まれることを切望して止まないものであります。

昭和十五年十二月二十日　印刷
昭和十五年十二月二十五日　改訂版發行

版權所有

著者檢印

兒童の心理學と家庭教育講話
【定價壹圓八拾錢】

著者　石川七五三二　東京市本郷區森川町一二七番地
發行者　平尾佐享　東京市小石川區水道端一ノ一七
印刷所　石川敏雄　東京市小石川區水道端一ノ一七
印刷所　太陽堂印刷所

發行所　東京市本郷區森川町一二七番地
國民教育普及會
電話小石川五八五二番
振替東京三一九二〇番
振替東京三二九七九番

409
447